

〈論文〉

競争的使用価値の恣意性を巡る論争における言語・ 記号論についての課題とより「高次元化」する消費社会 — ドイツ・イデオロギーにおける人間の欲望生成とその意識に関連して —

西 恭 宏

要 旨

ジャン・ボードリヤールなどの近代哲学の生産概念は、生産と消費との完全分離を前提とし、実物・実在に対象化した労働を生産とみなすため、そこでは、労働力(商品)生産や人間の社会的再生産などの、消費領域での本源的労働による「物質生産」を無視する結果、記号論的消費を伴う「いわゆるサービス労働」の機能による「物質化」(無形の生産物)を軽視する傾向にある。

小論では、ドイツ・イデオロギーの弁証法的唯物論で規定される生活世界での、「いわゆるサービス」労働による「物質化」(無形の生産物)を、人間の意識の発現形態である言語・記号の「かまど」とみなした上で、競争的使用価値とその恣意性を巡る論争での記号論的消費に関連させながら、ボードリヤールの記号論による「脱工業社会」(消費社会)の主張について検討した。その結果、当該論争において、ボードリヤールの記号論を前提とした石井の言う「脱工業社会」(消費社会)は、上部構造の文化・芸術などの言語・記号による「本来のサービス労働」の機能から実現されるものではなく、この言語・記号化は、もともと原始社会の太古より、人間の生活世界の土台において「いわゆるサービス労働」の機能による「物質化」(無形の生産物)と密着して発展し、それが「生産関係」の構造的変化のもとで下部構造から「高次元化」することにより、「脱工業社会」(消費社会)がもたらされると主張した。

0. はじめに

ダニエル・ベル(1973)は、工業化を経験した社会において知識・情報・サービスなどを扱う産業の割合が多くなることを「脱工業社会」(脱産業化社会)と名付けた。それから約50年が経つ。最近の中心地活性化の有識者会議の場で商業機能には「サービス業まで含めて考える必要がある」(拙稿、2021、72頁)という提案もそうした潮流に沿うものであった。

先の論考(拙稿、2021、71-99頁)では、従来から商学研究の基礎理論と認識されている、商業経済論的サービス認識の「有用効果生産説」による「いわゆるサービス労働」の機能に依拠し、「脱工業社会」で肥大化するサービス業は、価値形成的部門であり、通常の生産部門と同じように本源的国民所得を生産すると位置づけられた。そのため、近年の中心市街地活性化で実施される複合的商業施設において、商業部門に関連する広告、情報、運輸、交通などの特殊サービス事業をはじめ、教育、病院、イベントサービスなどのサービス一般事業などは、国民所得を生む産業とみなされる。そうなるのは売買操作活動が特殊サービスの交通事業者へ委託されるようになると、浪費的費用は、受託した当該交通サービス事業者にとっての生産費用となり、生産部門となるからである。そして、その「有用効果生産説」は「いわゆるサービス労働」一般まで適用されることから、このサービス一般労働も通常の生産資本と変わらぬ価値形成部門に転化するようになる。しかも、それらサービス経済化の拡大傾向は、純粋な商業活動よりも消費領域において労働者や人間の社会的再生産に直接的にかかわり、そのサービス部門の肥大は人間を高度化させ、新たな意識のめばえによって人間の歴史的発達を促し、社会も変化させるのではないかと、先の考察で主張しておいた。

もちろん小論の第1節で検討する、原始社会の人間が自然を作り変える労働においても、意識の流通としての言語・記号のコミュニケーションはあらゆる社会に共通する労働として含まれており(現代流に言えば広告・メディアに媒介された言語、情報、意識の流通、交通に相当)、マルクス・エンゲルスは、それら労働による「物質化」(無形の生産物)を、生活過程から派生する「いわゆるサービス労働」の機能として本源的労働とみなしている。

ところが小論の考察対象となる、競争的使用価値に対して異議を唱える石井(以下、敬称は略して表記)は、上記の言語・記号や文化などのサービス機能を、上部構造の観念的世界に位置する「本来のサービス労働」の機能に捉え、下部構造で本源的労働の「物質」生産とする森下の「いわゆるサービス労働」の機能とは異なり、非生産的労働としての主張を行う。ここに小論の問題認識がある。

小論では、第3節で検討する石井をはじめ第4節のボードリヤールの主張する言語・記号・文化などのサービスを、上部構造での「非物質」労働として捉える認識論を疑問とした上で、

競争的使用価値論争を巡って石原と石井の主張の対立にみられる競争的使用価値の恣意性での、石井をはじめとするボードリヤールによる唯物史観における言語・記号論の位置づけとその課題の検討を行い、「脱工業社会」とサービス労働機能との関係を再検討することにある。そこで小論の議論は次のように進める。

第1節では、石原の基本的欲望の分析を検討するにあたり、この論理の前提となっているドイツ・イデオロギーにおける基本的欲望と労働との関係について明確にする。これによって言語・記号、芸術、文化活動のサービス労働機能は、本源的労働として社会構成体の下部構造において物質生産に位置づけられることを明らかにする。

第2節では、直上のドイツ・イデオロギーにおいて生産と消費とが人間の労働と一体となっていた原基形態から、「生産力」と「生産関係」（以下では、この「生産関係」を社会的「生産関係」と呼ぶ場合もある）による歴史的相互発達によって社会的分業が発達し、近代哲学の二分法を前提とし、生産と消費とが分離されたもとの、石原の競争的使用価値の提唱について整理する。

第3節では、石原の競争的使用価値に対する石井の評価と批判を明らかにした上で、石井の史的唯物論の解釈の問題点、すなわち主観的意識は上部構造へ、物的客観性は下部構造へ、近代哲学の想定する主体と客体との認識論の問題点を掘り下げ、石井の下部構造においての「いわゆるサービス労働」の軽視をはじめ、この労働による記号化によってソーシャルとマルクスの言語・記号論は土台において論理的に一致していたにもかかわらず、それとは異なる石井独自による上部構造での記号論の特質性を明確にし、競争的使用価値を批判する際の石井の記号論的認識の問題点を明らかにする。

第4節では、石井の主張のもとになっているボードリヤールの記号論まで遡り、そこでの問題点を検討した結果、石井による競争的使用価値の恣意性の主張での言語・記号論的課題を指摘する。これによって、競争的使用価値の議論を巡る論争の正当性は、弁証法的唯物論の大枠を維持しながら人間の意識と自然との歴史的発達を射程に入れている、石原にあることを検証した。また、石井の援用するボードリヤールの言語・記号論は課題を残すものであったが、他方において、ボードリヤールは、未来の消費社会において社会的交換に埋め込まれた経済社会について傾聴すべき主張をしているため、その記号論の課題を留保した上で、その社会的交換の意義をマルクスの本源的労働と対比して考えてみたいと思う。そして最後に小論を概括しておきたい。

1. ドイツ・イデオロギーにおける史的唯物論と「いわゆるサービス労働」機能との関係

石原は基本的欲望を分析するにあたり Marx-Engels, *Die Deutsche Ideologie*. (1845-1846) / (旧版)『ドイツ・イデオロギー』(1956)古在訳による弁証法的唯物論を参考にして具体的欲望や抽象的欲望についての両概念を規定した¹⁾。そこで本節では、まず石原(1982、43-48頁)による、商品流通における使用価値の歴史的発展を基礎づけた、ドイツ・イデオロギーにおける基本的欲望の紹介と、先の論考(2021)で議論の対象となった「いわゆるサービス労働」の関係について簡単に指摘した上で、その後、第2節で弁証法的唯物論にもとづいて石原の明らかにした二つの基本的欲求(欲望)を検討したいと考えている。さっそくではあるが、石原の欲望分析の基礎となったドイツ・イデオロギーの論理をみてみよう。

(1) 基本的欲望分析の基盤としての史的唯物論 — 労働・意識・言語の「物質化」 —

人間がまだ自然の一部であった頃、彼らは動物と同じように自然の奴隷であった。人間は、自らの生存を存続させるために、外的自然を内的自然へと作り変えなければならない。こうして、人間の歴史的行為の第一歩は始まる。そして、マルクスは4つの重要な指摘を行った。

第1に、生きるためまず必要なことは、まず食う、飲む、住む、着ることである。人間は、これらの欲望をみたすための労働手段の産出、物質的生活手段の生産をはじめめる。この物質の生産は、人間のあらゆる諸活動とそれを基礎として成り立つところの人間生活の存続の大前提であり、マルクスはこの物質の生産を「第1の歴史的行為」とし、人間の労働を自然の歴史の中に位置づけることで、「人間社会存続の永遠的な基本条件」と名付けた。そして、マルクスは、それぞれの生産は人間の生命をつなぐための数千年まえと同じく日々刻々やり遂げなければならない歴史的行為であったとする(旧版、古庄訳、34頁)。

第2に、この生命を維持するための行為は、その昔人間が猿であった頃の行動と共通する。しかし、人間の歴史的行為が特徴的であるのは、満足された最初の欲望そのもの、満足させる行動、満足のためにすでに手に入れた道具、これら3つが新しい欲望へ導くということ

1) その研究の前提になっているのがアドラッキー版である。ただし石原の引用したアドラッキー版は、その原稿が著しく破損や欠落状態にあり、編纂作業においてもレーニンにはじまりスターリン主義的影響のもとで当時ソ連共産党の検閲や改竄などの意図的修正を受けたと言われている。そこで本節では、アドラッキー版において削除、改竄や削除部分を、修復した新編輯版『ドイツ・イデオロギー』廣松編訳・小林補訳(2002)を使用し、欠落部分を補い、旧版をより豊富化したいと考えている(引用の場合には、古庄訳を旧版、新編輯版を新版と表記する)。なお本論では、唯物史観、史的唯物論、弁証法的唯物論については区別しないことを断っておく。

ある(旧版、37頁)。

これは生活手段の物質的生産を通して生存のための欲求が満たされるようになると、あらたな欲求の生産も必要となり、その欲求を生産する生活手段の必要と、それを通じた生産様式とこれに対応する新たな消費様式とが現れるようになる。この二つは人間があらたな歴史を創造する様式でもあり、この欲求の再生産、さらなる欲求の生産が直上の人間社会の永遠的な基礎条件に含まれ、欲求そのものが人間の歴史を創造的発展させる基本的動因となると言うことである。

この論理水準における人間の自然に対する質料変換過程は、生産と消費とが未分化である。厳密に言えば、この論理段階は原始的労働という範疇にあり、マルクスは原始的社会の分析を直接行った形跡はないし、書物も発見されていない²⁾。資本制生産の発達によって社会的分業が浸透し、生産と消費との分離が明確に区分を前提とすることはまだ困難である。とはいえ、次の第2節における石原の基本的欲望分析の関係につけて、論理的に生産と消費との抽象化を仮構するならば、使用価値を作る既存の生産的労働(本源的労働)が消費的欲望を規定していること(正)、そこで獲得された所与の欲求はさらなる人間の能力の発達と古い知識をもった人間との間で協業における軋轢や対立の労働機能の差異性・異質性をもたらしながら、新たな労働機能による協働においてもたらされる「生産力」と「生産関係」との相互発展、それによって古い消費様式から新たな消費的欲望を派生せしめる(反)。そして、そこで得られた新たな生産的労働の発達は、さらなる欲望を規定する(合)こととなる。

このように「生産力」の発達とそれを可能とする社会関係(「生産関係」)によって欲望は再生産される。しかしそこでの「生産力」の発展は外的自然の影響を受けるため一様なものではない。それだけではない。自然の一部に位置する人間の創造する社会は、社会的人間関係(「生産関係」)の制約を受ける。そこでマルクスが次に明らかにしたのは、人間と「社会」関係についてある。

すなわち、第3に、自然の一部たる人間は、自分自身の生活を日々あらたにつくるために、男と女という身体的差異性によって、繁殖しはじめ「家族」をつくる。それは「はじめは唯一の社会関係である」(旧版、36頁)。そして、後になって欲望の増加があたらしい社会関係を産み出し、人口の増大をもたらす。その増加はあらたな欲望を産み出す。

マルクスは、この新たな社会関係を、二重の関係として規定する。一つは、自然の一部たる人間が個人としては外的自然に対して非力であるため、集団的な協働を通じて外的自然を

2) 林直道『史的唯物論と経済学』上巻、1971、126頁。

内的に作り変え、自己ならびに家族を含む他の集団の生命の維持と存続を行うという局面、あと一つは、この「生産力」と社会関係(「生産関係」)に規定される社会は、「生産力」も物質的産出量に制約されるということである(旧版、37頁)。したがって社会の存続は、一方においてそれが協働という集団をともなった労働機能とはいえ、もともと人間が自然の一部から派生したという身体的限界をもつがゆえにその協働組織には外的自然から「生産力」に制約を受けるといふ必然性をもつ。他方において、その集団(社会関係)では、その「生産力」が限定的であるがゆえにその欲望も制約されるという特徴をもつ。このようにみると人間の歴史は、協業という自己と他の人間とを結びつけて行われる社会関係(「生産関係」)とその人間に集約された「生産力」に条件づけられているために、この制約によって実現される生産様式(「生産力」と「生産関係」)での、個々の人間の欲求も、局限される関係にあるということである。

第4に、そうした協働という人間の心や人間の身体的相互のつながりを前提とする共同主間的活動においては、動物群とは異なり人間の意識発現から派生する言語能力とその発達を必要なものとする。ドイツ・イデオロギーの(旧版)において、マルクスは、家族をはじめ協業組織や集団(社会関係)を形成する上で、他者との関係を維持するため、そうした集団内での「生産関係」を維持する目的で、コミュニケーション(言語・意識)の流出・表出の必然性を指摘する(旧版、37-38頁)。

①物質は運動する空気層、音、要するに言語という形で現れる。言語は意識と同年である。……(筆者略)…言語は、実践的な、他の人間たちにとっても実存する、それゆえに私自身にとってもまた最初に実存する現実的な意思である。…(筆者略)…そして言語は、意識と同様、〈交通から〉他の人間たちとの交通に対する欲求と必要から、初めて生じる。意識は、こうして、そもそもの初めからすでに、一つの社会的な生産物(言語は人間が発声する一定の空気振動により生成される物質)であり、いやしくも人間たちが実存する限り、そうであり(物質的であり)続ける。意識は、もちろん当初は、単に最も身近な感性的環境についての意識であり、自らを意識しはじめた個人の外部に存在する他の人物・事物との、局限された連関の意識である。それは同時に自然〈について〉の意識である。(新版、57頁、カッコ=()は筆者挿入、〈〉は編纂時の抹消部分)。

①のようにマルクスは、(新版)において、意識の発現形態たる言語・記号は、人間の意識に含まれる物質的生産であると明言し、「実存」概念であるとする。ここで「実存」とは、現実的存在、自覚的存在であり、マルクスは観念的言語・記号論を「実存」に含まれる、「物質」と定義づけたところが重要である。これに対して「実在」とは、ある物事・人物が実体として存在し、あるいはリアルに存在することである。後述する第2節の石原や第3節の石

井はこの「実存」にもとづいて自覚する主体(人間)と現実的実体(物)を分離し、主体と客体を近代哲学の視点にもとづいて区分する。特に石井の場合は、直上の「実存」の意味が「実在」に捉えられ、労働に伴う人間の意識的観念の表現である言語・記号が(旧版)の指摘にもみられように労働の「物質化」とされているにもかかわらず、人間の「存在」から切り離されて「実在」化し、ボードリヤールの言語・記号との関係で上部構造のアイデアの世界で検討される(第4節(4)の今村による批判)。

もちろん(旧版)においてもマルクスは、①の人間の意思の発現形態の言語について、「物質」生産と規定し、その人間が声帯から発生する「物質は運動する空気層すなわち音響」であり、言語は意識とおなじように古いとする(旧版、37頁)。つまり、マルクスは、(旧版)・(新版)でも、「言語は実践的な意識」であり、一貫してそれを労働の「物質化」と見なしている。マルクスは次のように言う。すなわち、言語は、人間の外的自然に立ち向かいそれを己の内的自然に作り変える際の必然であり、そして言語は「他の人間ととも存在」(旧版、38頁)し、実践上の同一空間・時間に必要な「交通」(旧版、38頁)＝コミュニケーションとなる。

このようにみると、マルクスは、人間の意識の発現形態たる言語とこれから流出する「交通」を、人間の労働一般たる機能的サービス＝労働の有用性、作用・機能として不可分の関係に考えていること。そしてこのサービス労働機能を、商業経済論的サービス認識と関連付けると、マルクスの言う「交通」＝コミュニケーションは、商業経済論で言う無形の生産物ないし即自財(交通)の観念的物質として捉えることが可能であり、森下は、この生産物を生産的労働の本源的労働に位置づけていることである。そして、それらのサービス機能は、本格的に資本主義経済に突入した場合、「高次元化」し、情報や交通などのサービス労働の言語・記号として表出するようになり、この「いわゆるサービス労働」は、情報・通信、広告サービスをはじめ文化・芸術領域を含めて言語・記号化するサービス経済の生成基盤になることを意味する。つまり、そのマルクスの指摘は歴史貫通の意味で「有用効果生産説」の基礎を指摘したとみることが可能である。森下(1974、4頁、小論、1頁)は、この無形の生産物＝有用効果の生産を前提とした上で、その消費について「有用効果は経済の色々な部面、通常の商品の生産でも、取引流通のためにも、さらには個人的消費の部面でも、利用＝消費される」と規定する。

しかも、今日においてそれら「いわゆるサービス労働」の機能は、「個人的消費の部面」においてわれわれが労働者として自己の労働力を再生産する場合や、人間として社会的再生産する場合にも非市場領域で物質的再生産として、個人あるいは集団的にも日常的に消費的労働過程で行われる機能としてあらゆる社会に共通する労働の成果物として措定されていると

みてよい(森下、同上、引用を参照のこと)。

さらにマルクスによれば、その意識の現象形態である言語・記号の発達は、物質的生産においても人間社会を形成する上でも必須要件であり、自己の意識は自己の存在の反映であるとする自己の存在(認識論)と、他の人間の存在の関係(社会的存在認識)について、他者の人間との関わり合い＝社会的「関係」性という言い方で、人間の社会的存在認識を次のように指摘する。

「意識ははじめからすでに一つの社会的な産物であり・・・(筆者略)・・・一般に人間が存在するかぎりそうである」(旧版、38頁)とする。この(旧版)のマルクスの考えによると、市民革命以降、一般社会における「人間」の意識の存在を、社会や外的自然から完全に独立し、社会の代数的総和の一部としての自己の存在を念頭におき、自己(自然の一部)の存在と他者(自然の一部)の完全分離をはじめ、人間(主体)と自然(客体、他者)との完全分離や、さらには、主観(人間)と客観性(物体)の完全分離、そして、これらにもとづいて現実世界と観念的世界の完全分離を主張しているようにもみえる。この双方の関係は、後の石原・石井が採用するマーケティングにおける主体と客体との完全分離にもとで、欲望は弁証法的に下部構造で歴史的に生成されるか、それとも上部構造の観念的世界で生成されるかという論争そのものなかに見出される構図でもある。

しかしマルクスの主張する意図は、そうした近代哲学の想定する主体と客体との完全分離ではなく、直上の指摘は人間や自然(他者も含め)とが相互に関係し、その人間相互が社会的な関係性をもちながら集団(「生産関係」)を創り出すということである(廣松、1990)。こうして人間は、物質的生産を行うことで、後述するソシュールの記号論(マルクスと同じ記号論)との関連づけで言えば、それは価値形態に表現される相対的価値形態・等価形態の差異性から貨幣を誕生させ、貨幣交換を伴うという取引様式一般へ、市場基盤を歴史的に発展させる。そして、人間自らの存在は、経済的かつ社会的にも文化的に下部構造で「高次元化」する(ソシュールとマルクスの記号論については第3節の(5)を参照のこと)、つまり人間の進化と物質生産とは不可分の関係にあるということである。

(旧版)の編纂段階において複数行にわたり旧ソ連時代に改竄・削除された人間と歴史の発展、労働による物質生産に関連する文章を、『新編纂版』で復元すると、マルクスは次のように指摘していたということである。以下の文章は(旧版)で殆ど全部削除されていた。

②「われわれはただ一つの学、歴史の学しか知らない。歴史は二つの側面から考察されることができ、自然の歴史と人間の歴史とに区分されることができる。しかし両側面を〈(人間の生誕以来・筆者挿入)時間によって〉切り離すことはできない。人間が生存する限り、自然の歴史と人間の歴史は相互に条件づけあうのである」

(新版、24頁、〈カッコ〉は、旧版における編集段階での横線による抹消部分)。

②の指摘で、マルクスは、自然界の歴史と人間の労働行為 = 物質生産の歴史は不可分の関係にあることを述べており、この社会関係の指摘で理解できるのは、マルクスは、近代哲学が想定するような主体(人間)と客体(自然)とが分離された関係を想定していないということであり、その二分法のもとでの労働・生産概念とは異なり、マルクスは、①に見られるように人間は自らの歴史を創造するために、彼らの意識形態である言語・記号の「物質化」を、他者と社会的関係を維持する物質的生産に不可欠な労働とみなしていたこと。そして、人間は、単に自然に適應するのではなく、その労働によって自然に改良を加えながら、彼らの置かれた環境において社会的関係性を結びながら、自然や社会を作り変え、社会や自然を創造する人間の社会的存在としての、社会的労働の実践を重視していたということである。

以上がドイツ・イデオロギーにおいてマルクスの主張する4つの重要な点である。

(2) 史的唯物論における人間の歴史的発展の透視力

もう少しマルクスの最期の第4の指摘を敷衍するならば、次の諸点が明らかになるだろう。

マルクスは、第1に、①や②の指摘で推察できるように、人間の社会的「関係」性を、近代市民にみられるような単なる個々個人の人間の寄せ集めの総和としての人間社会一般ではなく(廣松、1990、37-39頁)、人間の対自然活動を必須とし、人間の意識の発現形態であるところの労働、言語・記号の媒介によって共同主間的意識にもとづいて社会は成立すると考えた。したがって、マルクスの弁証法的唯物論の世界では、諸個人が相互に関わり合いながら協働活動や社会的分業を行う人間社会を仮定しており、直上で述べた言語と意識の関係は、実践において自己の意識の発現形態である言語(コミュニケーション)が他者によって受け止められ、他者の認識を通してそれが自己に跳ね返るときはじめて、自己の観念的意識としての、自分の社会的存在の意識が下部構造の生活世界で形成されていく(自己を自己として社会的に意識する存在)ようになり、自己の存在を前提にした社会的存在 = 他者性を定義づけているということになる(弁証法的認識論)。

ところが第3節(脚注10)で検討するように、石井は、近代哲学の唯物論と観念論との分離にもとづいて、レーニンをはじめスターリン主義的な唯物史観を援用する結果、あるいはその批判の結果としてゲオルグ・ルカーチ(1923、『物化理論』)の物象化や疎外論を援用するボードリヤール(1973)、/(1981)、宇沢・今村訳『生産の鏡』112頁)のイデオロギー的思想に影響されているため(脚注4参照のこと)、スターリンやボードリヤールでは史的唯物論の社会が「生産力」中心に置き換えられ(人と人の取り結ぶ社会関係の軽視、使用価値生産への

偏重)、認識論が誤って社会構成体において土台と上部で敷衍される。そのため上部構造は観念的労働や精神的労働をする場としてみなされ、下部構造は単に物的生産に携わる労働の場だとするマテリアル的な意味での「实在」主義が一般化³⁾し「感性的⁴⁾」な側面に囚われるよ

3) この「实在」主義による「感性的」な側面とは、マルクスがアダム・スミスに対し素材の規定性に陥るなどして批判した文言である。その規定にこだわったのが、先の論考(2021)でサービス労働論争に関連付けて検討した、労働そのものの機能を「本来のサービス労働」とする「風呂学派」の「通説派」であり、これとは対立する「反通説派」に属する「森下学派」の「いわゆるサービス労働」であった。したがってボードリヤールの見解も「風呂学派」と同じ主張になっている。これについては注目すべきであり、マルクスの弁証法的唯物論を純粋に理解するのではなく、マーケティングと商業経済論との相互関係を解明する目的で、マルクスの大枠を残しながらも、それを現象に近づけて分析し、近代哲学にもとづいて修正したのが風呂であり、石原であると推定できる。ただし双方は原理論と現象に注視する「中範囲」に属する研究だけに、風呂も石原も労働による「物質」の生産については、原理論の世界に属する研究となるので、厳密な定義を行っておらず、それが原因となって対立したのが先の拙稿(2021)で検討した風呂と森下のサービス労働概念の相違点であった。風呂や石原のように資本制生産をアダム・スミスの生産労働で物的に捉えるのか。それとも森下のように資本制生産の資本の増殖として物質(無形の生産物・有用効果)を捉えるか。この物質の生産をどのように生産的労働に関係づけて検討するかによって、言語・記号の位置づけが土台か上部かに変化するということである。さらにこの問題は、究極的に運輸労働を使用価値完成説で捉えるか。それとも森下の言う有用効果生産説(無形生産物説)で捉えるか。この二つの「交通」労働に関連してくる問題でもある。この問題は論者によって大きく二つに分かれ、それゆえ商業経済論の旧版・改定版ではこの物質生産に関連する交通サービスの議論は削除されているため、拙稿(2018)ではそれ以前の1950年版(初版)を用いて商業経済論においての、「森下学派」による当該サービス労働の取り扱い方について検討した。詳しくは拙稿(2018)を参照のこと。

4) ここでは先の論考(拙稿, 2021)で指摘したアダム・スミスの素材規定性や小論で検討する(Baudrillard, J. (1973), *Le miroir de la production.* / 宇沢・今村訳(1981), 『生産の鏡』112頁)の援用するゲオルグ・ルカーチ(1923, 『物化理論』)の物質概念も物体の生産となっている。スミスの場合には支配労働価値説のために価値の源泉がどこからくるのか突き止められなかったし、ルカーチの場合には、資本論第1巻の商品論の分析に留まっており、「生産関係」の捉え方が資本制生産の主たる目的である剰余価値増殖とその実現という資本の生産と再生産視点としてではなく、単純商品流通の世界での労働過程による分析枠組みでの、価値と使用価値との実現であり、資本生産とその流通とはなっておらず、スミスと共通性をもつ。この近代哲学の生産概念においてルカーチはスターリン主義の機械的弁証法を批判することにより、修正主義を提唱しハンガリー動乱の首謀者の一人として知られる。彼の修正主義の考えは、弁証法的唯物論による「生産関係」の観点からの改革ではなく、現代の資本主義の矛盾は、道徳的中毒やイデオロギー的中毒とみなし、政治的闘争や文化改革を通じた上部構造のイデオロギー的思想に偏重した観点からのみ(林, 1972, 前掲書, 下巻, 119-135頁)資本主義社会を批判する。つまり林(1972)の批判は、資本制生産過程は労働過程と剰余価値増殖過程との統合で成立するにもかかわらず、ルカーチは前者の「生産力」のみの改革を問題とし、後者の「生産関係」について労働主体、生産手段、資本家的所有形態について何ら手を付けることなく、これを政治闘争や文化の問題としてこの二つをイデオロギー的(上部構造的)世界の問題に置き換えるというのである。そのためこれを援用するボードリヤールの消費社会の批判も、近代のもとで派生する「生産関係」(人と人との結びつき

うになる(脚注10)。それによって下部構造は、観念的意識の存在たる人間による言語記号を創造する物質生産の場でなくなり、単なる「実在」のどうしの人間が物的生産に携わる機械的弁証法による労働の場とみなされるようになって、労働を通じた人間の歴史的創造的発達が無視されてしまう。この結果、下部構造における労働に含まれていた言語・記号論に関連する意識＝「物質化」が純粹に形而上学的世界で議論されるようになる(この問題については第3節(5)、第4節(4)を参照のこと)。

第2に、マルクスは、自己の意識を社会関係の中へ積極的に投じて人間は社会的動物となりえると考えた。すでに明らかなように、個体としての存在の認識は、人間の意識の発現形態として言語の発達を必然的なものとする。そして、その人間の進化は、「生産力」と社会関係の発達から要請される。人間はこれによって社会的実存の認識へと「高次元化」し、動物の本能にはない社会的意識を形成するようになる。しかも、協業に伴う意識の発現や言語は、もともと個としての自然に対する人間の身体的弱さから派生するものであり、人間の生命を自然から守るところから流出する物質的生産である。これを小論では「物象化」と呼ぶ。その「物象化」(脚注3、4参照のこと、ルカーチの物象化と相違に注意)は、自然現象や神への崇拜などの、アニミズム、シャーマニズム、八百方(やおろず)の神などの、死への恐れのための儀式的活動も、原始的社会では物質的生産の言語・記号論に関連⁵⁾して行われるようになった⁶⁾。

の価値論)の構造的変化による脱工業化ではなく、必然的にそれとは切り離されたところで近代の「生産力」中心主義に対する労働過程の対立や反動としてそれが基盤となって人間の労働力が商品となる「疎外論」や物象化(物象化と「物象化」の相違点に注意)から脱出し、労働の機能が生のままの現出を主張する。したがって、そのもとでは、必然的に言語・記号をはじめサービス労働機能が上部構造に位置するイデオロギー形態と類似する実存のない幻的存在となり、本論で検討するソシユール言語・記号論との不一致をみせる要因となる。しかもその考えにもとづけば、独占段階におけるサービス生産が論理的射程に入らず、拙稿で指摘した高度に発展した資本生産の下部構造での「物象化」(無形生産物)が分析の対象とはなりえないという限界がある。この意味でルカーチを援用するボードリヤール(前掲書、112頁)は、「この(ルカーチの)形態こそ出発点とすべきある」として、資本制生産の下部構造とは別の上部構造の文化論的観念論の世界へと言語や記号を締め出してしまうのである。

5) そこでは当然、上部構造の形而上学的観念論の世界で言語・記号、すなわち「本来のサービス労働」の機能と、形而下の下部構造のもとで展開される「いわゆるサービス労働」の機能との対立になるわけである。それについては、社会構成体の上部に属していた「本来のサービス労働」者が社会的分業の発展によってその生産構造に組み込まれ、上部構造から吐き出されることによって、「いわゆるサービス労働」者に転化し、土台における生産過程で有用効果を生産する労働者になるという主張、すなわち使用価値生産(サービスの使用価値)からみた、人間社会存続の基本条件の拡大(本源的規定の拡大)について飯盛(1985)が主張しているので注目すべきであろう(脚注10参照のこと)。

6) この自然宗教は(言語活動の)交通社会形態によって条件づけられている、としている(『新編輯版ド

その意味で、人間の社会関係の発達の過程、すなわち「人間社会存続の永遠的な基本条件」における「第1の歴史的行為」において、特に自然がほんの僅かにしか歴史的に変容されていない社会においては、人間は自然に畏服(新版、59頁)し、自然現象や神への崇拜などの儀式的活動も、原始的社会では言語・記号とともにその意識形態が労働の「物質化」の生産として行われるようになる。このようにみると、人間の社会関係の発達の過程において、言語や宗教、芸術や音楽などの文化は、人間が生活を基盤とする土台において「生産力」とその社会関係の発達と一緒に物質生産として本源的に埋め込まれていたとみてよい⁷⁾(お祝い事、起工式、地鎮祭などは現代の製造業や建設業で慣習化している)。

したがって先に(1)の第4で指摘した、労働の機能＝「いわゆるサービス労働」に共通する労働機能が「脱工業社会」の下部構造で「高次的」に発達するのは、社会経済的構造変化に伴う「物象化」の流出として現出されると推察される。このようにして、言語・記号および文化関連は、物質的生産の一部であり下部構造に位置することが判明する。しかも、それは、競争的使用価値を巡る論争においてその恣意性の議論に対して、一つの評価基準となるであろう。

2. 石原武政による欲望の基本的性格分析と使用価値の歴史的な性格分析

(1) 石原による二つの基本的欲望

石原(1982、43-48頁)は、人間がまだ自然の一部であった頃に、生産と消費との相互作用を想定し、「生産力」と「生産関係」との相互発展関係に着目しながら商品流通における使用価値とその欲望の歴史的発展を解明する。次にみる二つの欲望はそうした商品流通と消費とを考える上で基本となるものである。

石原(1982、43-44頁)は、消費者の欲望を検討するにあたり、欲望を二つに区分する。一つは、「自然的欲望」であり、「人間の生物学的・自然的定在に規定されるだけの欲望」であることから、その欲望は人間にとって「内在的」とであるとされる。このような社会関係をそのうちに含まない欲求を「抽象的欲望」と言う。その意味で「抽象的欲望」は、具体的な充

↙ イツ・イデオロギー』59頁)。

7) 平田(1994、121頁)は、筆者と同じように「国家制度も、法律思想も、芸術も、さらに宗教的観念さえ、この土台から発展したものである。だからまたこれらのものは、この土台から説明されなければならないもので、一けっしてこれまでやっていたように(形而上学的哲学)、これを逆さにはしてはならないのである」(『資本論研究入門』121頁、原典、エンゲルス「カール・マルクス葬儀の辞」カッコは筆者による挿入)。

足手段を予定しない、換言すれば、それは生産物や商品の属性とは結びついていない欲求と言える。そしてあと一つは、それら属性と密接に結びつき具体的充足を予定した欲望を「具体的欲望」と石原は名付ける。このような対象の「実存⁸⁾」によって規定される具体的欲望は、ドイツ・イデオロギーで「満足された最初の欲望そのもの、満足させる行動、満足のためにすでに手に入れた道具が新しい欲望を導く」(旧版、35頁)という位置づけになっており、石原(1982、45頁)は、この言説を引用しながら、具体的欲望はこの「生産力」の発達に影響されるだけではなく、その「実存」の「与件」となっている「社会関係への適応」と「人間の内的心理の形成・発達」(石原、1982、44頁)からも制約を受けるという。これは先のドイツ・イデオロギーの分析によって明らかにしたように自己の存在は、社会関係性に入り込むことで、社会的存在としての個人の存在は確立されると言うマルクスの主張とほぼ同じだとみてよい。

マルクスは、弁証法的唯物論によって、人間の歴史や欲望を、「生産力」と「生産関係」との相互関係=生産様式によって発達すると考えた。先のドイツ・イデオロギーにおける原始社会の労働過程の考察で明らかな通り、人と人とのつながりによる社会的存在形式、すなわち言語・慣習・宗教などの文化的かつ社会的関係は、始祖的レベルにみられるに過ぎなかった。しかし、その後の商品生産の発達は、それまでの単純商品生産様式ではなく、自由競争段階に入り、商品は商品資本の生産としての剰余価値生産とその実現という形態に突入し、資本制「生産関係」が浸透し生産と消費とが決定的に分離されるようになると、ドイツ・イデオロギーでみられる始祖的社会的関係(「生産関係」)は、資本主義社会の下部構造において社会的存在としての個人を確立し、「生産関係」の一つの要素として「生産力」に基本的に影響を及ぼすのみならず、逆に、「生産力」から規制されることで、「生産力」と「生産関係」

8) 石原の主張では、あくまでも形式的ではあるが、弁証法的意味を込めて「実存」(主体と客体との相互作用関係に着目し土台を構成する)となっている。それに対して、ボードリヤール(生産の鏡、32頁)は、次のよう言う。マルクスを分析する場合には価値体系と結びついた分析でなければならない、ここでは意味の宗教が始まり、ひとつの〈客観的実在〉を表現するとし、しかもマルクスの時代においては商品の二要因を前提として、〈実在する〉意味サレルモノの意味スルモノである記号になると主張している。ここではマルクスの「実存」という表現が「実在」という表現に修正されていることが分かる。ただし、この場合にボードリヤールは、マルクスの「実存」的欲求も、彼のいう「実在」と一致しているので、この「実存」的欲求を記号で表現するシニフィアン・シニフィエもマルクスやソシュールと同じように対と扱われる。ところが後の記号の戯れになると、「実在」としてのシニフィアンとシニフィエとの独立した関係がマルクスの価値法則のもとでも前提されていたものから、シニフィエが独り歩きしてそれまで一対となって表現されていたシニフィアン・シニフィエの記号の座標軸もシニフィアン(交換価値)のみが前面に出され解体されるようになる。

の相互発展的な生産・消費様式を創造するということである。したがって直上で石原の言う社会関係とはその「生産関係」の要素を指しており、同氏の言う生産と消費の関係は、「生産力」に規定されながらも、社会的文化関係を含む「生産関係」に規定される相互規定関係の位置づけになっていると推定される⁹⁾。そして、ドイツ・イデオロギーの(旧版)で言及される言語・記号関係についても、直上の内容と同様に、「生産関係」(社会関係、社会的文化的関係)に規定されながらも逆にそれが「生産力」を制約する要素をもつということを指摘しなければならない(この点については第3節(6)のソシュールの記号論とマルクスの記号論の一致を参照のこと)。

ともあれ資本制生産段階における生産と消費との分離によって、個別的にみれば生産者は、消費者の欲望操作を行うことは不可能である。消費者側から言えば、彼ら(主体)はただ(生産者が提供する商品という客体)に出会うことによって主体に派生する欲望を内的な像として受け止めるだけにすぎない。そのもとでの生産者は「仮設市場像」をイメージし、彼の「抽象的欲望」が観念的に措定したそのイメージが的確になされたかどうかは商品交換の場において実証されなければならない。重要なことは、生産者の提供する商品に対する消費者の欲望は、それに出会い体験することで消費者側の内側の欲望として派生することになる。そして、その欲望そのものが消費者の観念論の世界に描かれる非実体となるだけに、その欲望は、使用価値という実体に関連して「生産力」や「生産関係」にもとづいてどこかで歴史的かつ社会・文化的に規定されながら発展する下部構造説(石原説)と、その欲望は、「生産力」や「生産関係」とは関係なく、観念的世界の文化に規定される上部構造説(石井説)との対立に発展するようになる。それゆえ第1節のドイツ・イデオロギーの弁証法的唯物史論の分析は、石井説に対して観念論という上部構造の世界から文化・芸術、言語・記号は発達するのではなく、人間のイメージする観念は、生産的労働、交換労働、消費的労働などの「生産力」と「生産関係」の相互関係において意識的活動と密接に関わり合いながら、下部構造における物質生産と不可分の関係において歴史的にも文化的にも発展する、このことを示していたとみてよい。したがって、ドイツ・イデオロギーにおける労働による「物質化」を歴史的「かまど」に位置づけてみる限り、下部構造説の石原の主張は肯定可能であると推定されるということである。

そこで以下では、前者に属する石原の欲望の歴史的発展を、独占段階で寡占製造企業が台頭しはじめる時間軸へ視点を移してみよう。

9) 石原(1982, 44-45頁)が一旦形成された人間の「生きようとする要求と社会組織の2つの要素は、個人としての人間にとっては原則的に変更できない」と主張していることからそれが理解できる。

(2) 石原による競争的使用価値の提唱

自由競争段階における生産企業は、ただ欲望を内的な像として受けとめ、それを具体的な商品に体现させるだけであったが、独占段階における寡占企業は、そのような消極的・受動的な市場の傍観者ではなかった。同一部門内の諸企業は、類似した属性をもつ製品を生産している。それゆえに各企業にとって必要なのは彼に対する特殊排他的欲望の形成であり、その需要基盤を創造することによってのみ寡占企業は、個別的価値実現の安定に努めなければならない(57頁)。当該企業は、激化する市場問題を個別的に対応しようと、製品差別化を行う。

石原によると、製品差別化を中心としたマーケティング諸活動は、基本的に同質の製品を異質のものとして消費者に提示することとなる。それゆえ、消費者の行動は商標、ブランドを含めた製品差異をはっきりと伴う選択の形をとることができ、選択された商標やブランドについての学習が開始され、知覚偏向が形成されていく。こうした過程を通じて消費者には特定の商標やブランドに固執するより細分化された欲望が形成される(石原、1982、58頁)。そこで石原が強調するのは、特定の製品に対する欲望は消費者自身の内部からではなく、外部からの影響によって形成され、したがって、この製品差別化によって与えられた製品の物的属性は、それが対応するべき人間の欲望が創出されてはじめて使用価値となる、と言うことであった(石原、1982、59頁)。

しかもそこでは導入された新たな属性要素や値が企業競争の模倣と追従によって平均化され、その製品機能の高度化に不可欠なものとして人間の欲望をつかむのならば、それは製品の基本的属性の一部を構成するようになる(60頁)。たんに直接的な差別性だけでなく、それを含む総体としての、広告や情報などを含んだ物象化したモノ・ことがそれに含まれて競争的使用価値の担い手として表現するようになる。この石原の主張は、広告や情報を含むメッセージが社会的に受け入れられて競争的使用価値の意味を形成すると言うことを含意するのみならず、もともと対象の「実存」に内在する属性によってその人間の欲望が社会的にコード化されることによってはじめて使用価値になるとするならば、藤本(2003、23頁)の指摘を借りれば、「実存」がどうであろうとなかろうと記号の戯れによってサービス機能の記号化が「脱工業社会」をもたらす可能性があるということである。

そこでサービス経済化を考える上で重要なのは、言語や記号、情報を活用した社会的コード化・物象化した意味市場の成立をマテリアルの生産物から分離して観念的実在の記号化としてみなして「脱工業社会」について検討するか。それとも第1節で検証したドイツ・イデオロギーで本源的規定を受ける労働の「物質化」(=「物象化」)を記号化とみなして論理展開を行うか。このどちらの分析を選択するかによって「脱工業社会」に対する考えも大きく

異なるということである。前者の方法を採用する石井は、以上のような石原の競争的使用価値の提唱を前提にして、同氏の分析について評価できる点、批判されるべき不十分な点を指摘した。以下ではその要点をみることで、石原と石井のマーケティングの基本となる方法論の違いを明らかにしたい。

3. 石井淳蔵による競争的使用価値の評価と批判

(1) 評価

石井は、石原の競争的使用価値を評価する点としておおよそ以下の点を指摘した(石井、1996。158-160頁)。

第1に既存のマーケティングにおいては、消費者の「もっとも規定にある欲望」を想定し(内的欲望の想定)、その適応としてマーケティングが想定されていたのに対し、石原は、消費者の欲望は、マーケティング(生産)に依存的であり、その活動がある程度の範囲で需要基盤に影響を及ぼし、外から欲望を創造させながら、人々の内的像に生じる欲望に対して適合させるという主張を行った(マーケティングの創造的適応過程の明確化)。

第2に石原は、製品の使用価値的側面をあらゆる歴史的に共通する労働の生産物として普遍的なものとして捉えてきた従来のマーケティング学者に対して、使用価値も「生産力」や「生産関係」の発展とそれに起因する所得の増大などを媒介として、競争によって使用価値は歴史的に変化することを明確にした。そして石原の競争的使用価値の確立の主張は、製品の属性について基本的機能部分、副次的機能部分として区分していた従来の考え方を否定し、価値実現競争の手段として用いられる前からその使用価値の属性をア priori に確定することは不可能であり、それが消費者に受け入れられてはじめて使用価値となることを意味するものであった。

以上が石井の石原への評価する点である。

(2) 批判

しかし石井は石原の競争的使用価値には、不十分な点があるという(石井、1996、160-161頁)。

事例を用いて石井は次のように石原を批判する。音がする入浴剤の例をとって入浴剤をふるのなかに入ればパチパチと音がする属性をもつ。それは、入浴剤の本質的機能にみならずにしてもほど遠いように思われるが、それが企業競争において差別性の属性となるとき、消費者の欲望や欲求を反映して、使用価値の確立が成立したことになる。もちろんそれが単な

る珍しさで市場から消えるようなことになれば、使用価値とはなりえないとする。つまり石井の主張は、入浴剤のパチパチという音が消費者から受け入れられなければ、パチパチという音がする属性のみならず、入浴剤という製品一般の使用価値の諸属性も成立しないというのである。この石井の主張に対して石原(1996、181-182頁)は、異論を述べる。入浴剤に音の属性を最初にもたせた導入期においては、それはまだ消費者の具体的欲望には向き合っていない。この意味でそれが使用価値であるかどうかを事前に確定することができなかった。しかしそのことから入浴剤の製品属性が全般的に不確定だとはいえない。それは入浴剤の属性の要素の一つだけに過ぎず、その他の色、香りはそれが入浴剤の属性として取り入れられて以来、製品属性の要素としての位置づけは歴史的に規定されてきたので、その基本的属性はなくなると主張する。しかし石原は当初、基本的機能と副次的機能の区分を否定し、製品の物的属性は、それが対応するべき人間の欲望が創出されてはじめて使用価値となると主張したはずである(石原、1982、59頁)。だからこの石原の主張には矛盾があると石井は指摘するのである(使用価値の恣意性)。

第2に、石井によれば、石原がそうした製品の基本的機能、副次的機能をどこかで想定せざるをえないのは、「基本的欲望」を仮定しているからに他ならない(石井、1996、162頁)からだと言う。

このような石原と石井の主張に齟齬をきたす根本的原因は、石井のイメージする人間の欲望(1993、181頁)にあっては、「人間は(何時の時代においても)常に『過剰』の中で生活してきた」のであり「食べる、飲む、住む、着る」という「人間社会存続の永遠的な基本条件」=「基本的欲望」を、石原のようにそこにおいて仮定する必要もないし、そのもとで人間は「決して、モノの性質・効能・機能を第一義として、その(消費する)ことを決めているわけではない」と考えるためである。それゆえに、この弁証法的唯物論による「基本的欲望」を仮定し「生産力」と「生産関係」の発展によってその欲望の対象化した使用価値の歴史性を証明しようとする石原の論理は、石井からみて誤りになるということである(石井、1996、162-163頁)。そのため石井の重視するのは、「生産力」と「生産関係」によって規定される使用価値ではなく、むしろ文化が規定的要素となって生産を規定する局面こそが強調されなければならないとする(石井、同上、163頁)。

石井は、このような石原の競争的使用価値の批判を経て、次の分析で石原の基本的欲望基盤となった史的唯物論に対する批判、そして、製品を規定する価値規定を否定することで、交換関係(命がけの飛躍)のアプリオリな合理性の否定を主張するようになった。要するに石井は、石原の使用価値規定や競争的使用価値の提唱の基盤となったマルクスの人間の歴史の発展の論理に対して、その「生産力」と社会的「生産関係」の内容について破壊を試みると

いうことである。

以下では、石井の価値批判と交換関係の重視のみを取り上げる。特に価値については、結論を先取すれば石井の主張はマルクスの批判にはなりえておらず、そのマルクスの価値の指摘が石井の主張に反してボードリヤールの記号論につながっているという経緯について触れておきたい(具体的には第4節(1)で説明する)。

(3) 石井によるマルクスの商品価値批判

石井は、サーリンズによるマルクスの史的唯物論での「生産力」重視の批判¹⁰⁾に関連させ

10) 石井はサーリンズの主張を借りてマルクスを次のように批判する。

サーリンズ曰く。①「史的唯物論の〈合理的革新〉とは、労働に他ならない。人間の主体性(〈欲求〉)と客観的世界とを媒介する労働過程が、避けたい自然の事実性と技術手段を作動させるのであり、残余の文化構造物がある上に樹立される具体的な基礎なのだ、というわけである。…略(石井)…〈目的〉、〈観念的イメージ〉、その他類似の何が前提されようとも、労働過程(の生産の結果…筆者挿入)こそが、想像力よりも強力で、意志から独立した根拠とされる。人間の物質的欲求が本源的だとされるかぎり、本来的な生産力の理論が根本的な構成原理となり、社会構造は〈現実にあるがまま〉の個人の生活過程から発展することになる」(石井、同上、165頁、原典、サーリンズ、1976/訳1982、209-210頁)。

上記①は、マルクスがドイツ・イデオロギーの執筆10年後に唯物史観の定式化を行った『経済学批判』(1859)からの引用である。サーリンズはその内容に対して直上の批判を行う。この①の解説を行うと、サーリンズの引用する弁証法的唯物論は、スターリンの言う唯物論的機械弁証法で、「生産力」のみで歴史が創造されるというものである。そこでは、下部構造において人間という歴史を創造する主体が不在となっている。つまり「生産関係」において人と人とが結ぶ関係＝価値関係が軽視されている(その結果としての使用価値の生産だけが着目される)。さらにこれが原因になって、冒頭のドイツ・イデオロギーの分析で判明したように観念的労働や精神的労働が下部構造に位置づけられていたにもかかわらず、サーリンズでは上部構造において展開されるようになる。

以下では、さしあたって、先の論考(2021)で紹介した森下のサービス労働認識は、直上のスターリンの主張に見られるような社会構成体の上に誤って意識を敷衍した定説とは切り離して行われているため、上部構造での「本来のサービス」についての言及はない。そこで、上記の『経済学批判』の唯物史観での、サーリンズや石井の支持する上部構造論における「本来のサービス労働」に対し、その労働は下部構造で「いわゆるサービス労働」に転化するという論理を明確した飯盛(1985、172-173頁、1990、拙稿、2006、257頁)の主張を取り上げ紹介しておきたい。

飯盛(1985、172-173頁)は、上部構造の「本来のサービス労働」から、「いわゆるサービス労働」への下部構造の転化によって、サービス経済化を「使用価値」の側面から拡張する。すなわち、マルクス(Marx.K)の『経済学批判 序章』では、唯物史観の定式について次のように指摘される。「人間は、彼らの生活の社会生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係を取り結ぶ。この生産諸関係の総体は社会の経済的機構を形づくっており、これが現実の土台となって、その上に、法律的、政治的上部構造がそびえたち、また、一定の社会的意識形態はこの現実の土台に対応している」(同上書、/大内・武田・その他訳、1956、13頁)となっており、そこでは、人間の歴史について、

て価値規定まで踏み込みこれを批判する。

①われわれの前提とする労働は、人間のみに属するような形の労働である。蜘蛛は織匠の作業にも似た作業をするし、蜜蜂は・・・多くの人間の大工の顔色をなからしめる。だが(大工が)・・・蜜蜂にまざっているゆえんは、大工のほうは蜜房を、蠟で作るより前に、頭でのなかでつくっているということだ。労働過程の初めにすでに労働者の頭のなかに、したがってすでに観念的に存在していたものが、労働の結果として出てくるのだ」(石井、1996、165頁、原典、資本論第1巻/向坂訳、1967、232頁、カッコは筆者による挿入)。

石井は、マルクスが①において大工という人間労働の観念への依存性を示しながらその観念的側面を軽視したのは、労働の一義性を強調し、労働こそが価値の根源だからだと批判する(同上書、232頁)。もちろんそれは論理的方法でまず誤りである。価値規定を使用価値に関連させて批判することはできない。価値規定の内部には使用価値を一片たりとも含まれ

▼ マルクスは土台と上部との統一であると指摘する。

この文章で飯盛(1985、1990)が目指すのは、マルクスは意識形態について文化・芸術・宗教などが、政治的諸制度と一緒に上部構造に属すると述べていないこと。むしろ土台を構成する生産部門に「対応」(照応)しながらと、述べている(拙稿、2006、257頁、飯盛1985、172-173頁、1990)。これによって、意識形態は、下部構造で、サービス部門はじめ、流通部門にも一定の影響を及ぼすようになる。そして、そのような精神・意識が、社会的「生産力」を基軸とした社会的分業の進展を通じて、土台内部で浸透しはじめることによって、かつて上部構造で文化・芸術家、宗教家、教育者、音楽家などの「本来のサービス労働」として雇用されていた人々を上部構造から吐き出す結果、下部構造の「いわゆるサービス労働」として資本を生産する労働者に転化させるようになる、ということである(飯盛、1985、92頁、1978、10頁)。したがって本論のドイツ・イデオロギーの分析でも明らかなように文化活動は、社会構成体の土台において記号・言語の意識形態とその労働が一体化して発展することとなる。この飯盛の主張は石井の主張やボードリヤールとは明らかに異なる。この飯盛説を含む「有用効果生産説」を支持する立場をサービス労働論争では「反通説派」と呼び、森下をはじめ加藤、馬場、小西、筆者などもこの範疇に属し、先の論考(2021)で明らかにした橋本、風呂、石原、宇野、阿部、江上、大野などはサービス労働論争で「通説派」に属する。なお、この飯盛説は、資本主義的生産労働を拡大された本源的規定の労働過程と価値増殖過程の二側面の統合として捉えるのに対し、森下は、資本(剰余価値)を生産する労働を資本主義的生産的労働とし、労働過程をその中に含んで抽象規定とみなす。そのため厳密な意味で森下の説とは違い飯盛説は利潤論の視点になっている。それについてここでは問題としない。いずれにしても飯盛(1985、1978)に依拠すると、サービス労働の資本生産を肯定するために、まずその基礎となる使用価値の拡大を行う点を認めたこと。したがって、資本制生産の結果は、物を作る労働ばかりではなく、精神的労働を含めた様々なサービス労働が投入されてはじめて対象物となる、ということの意味する。これを認めないと競争的使用価値そのものの製品生産段階やその販売に関わる情報・コミュニケーションサービスなどのサービス労働が賃労働化してはじめて、マーケティングが成立するという、その基盤と歴史性は失われてしまう。

ないからである(生産関係と生産力の混同)。脚注10に記載したサーリンズの引用文はこのスターリンの使用価値生産主義を批判しているのみであって、マルクスの価値規定まで否定し、引用で批判していないところには注意すべきであろう。そして直上①の引用のようにマルクスが言うのは、既に冒頭のドイツ・イデオロギーの分析で明らかのように、人間を自然の一部とみなし、その労働過程で人間は道具を使い原材料に対して意識を対象化させながら、人間に意識の発現たる言語・記号化が物質生産とともにその人間の能力も向上し、彼らの頭脳・肉体を発展させる。このような人間の進化の歴史を文字通り主張しようとしたためである¹¹⁾。石井のように「生産力」を強調し社会的「生産関係」を軽視するスターリン的な弁証法的唯物論や、それと同じ思想にもとづいて第4節で後述するボードリヤールの記号論を援用するならば、労働の観念的側面が、上部に移されてしまう結果、社会構成体の土台における人間の意識は全て無意識とみなされ、本能に従って消費する人間となり、思惟することもない、あらたな文明や文化を創造することが困難な機械的人間像となる。そのようになるのは、旧ソ連のレーニンをはじめスターリン主義的認識論にもとづいて、人間の意識・精神は上部構造に、唯物論的客観性は下部構造に位置するという、もともと人間の歴史を考察する唯物史観において哲学的な認識論を彼らが間違っただけで敷衍したからであり、そのため森下にあっては、スターリン的認識論は援用しておらず、この認識論の欠陥について石井は気づくべきであろう。

(4) 石井による価値否定と交換関係の重要性の主張

ところが石井は、観念労働を社会構成体の上部で議論できるようにするため、脚注10と上記①の大工と蜜蜂の例文を示した後、これに続いてマルクスの最初に価値ありきの主張を取り上げ、交換における価値の想定は誤りだと主張する。

②人間が彼らの労働生産物をたがいに価値として関連させるには、これらの物が、彼らにとって同種の人間労働のたんなる物的外皮と見なされるからではない。逆である。彼らは、彼らの異種の生産物を、たがいに交

11) マルクスの弁証法的視点から指摘しておきたい点がある。先の大工の例においての人間は単に家を作って終わりとなるのではない。その労働過程の上で、大工は自己の意識を集中し、その直接的意思の反映たる技術、段取り、材料のよし悪しなどの判断をする。こうして人間労働一般においては、労働を意思の発現形態としてみるならば、自己の知識を発展させる。それによって頭脳を発展させ、言語を発展させるという人間の進化の歴史を記録する。したがって人間の労働とは無媒介に観念労働を論理的に削除するならば、マルクスの言う人間の歴史の弁証法的発展は遂げられずに、人間は観念的神が創造したものとなる。

換において価値として等置させることによって、彼らのさまざまな労働(= そのちがった労働)をたがい(= 相互)に人間労働として等置させるのだ。彼らはこのことを意識はしないが、しかし(論理的に)そうやっているのだ。だから価値の額に、価値とはなんであるかは書かれていない(1996、石井、166頁、原典、資本論第1巻、向坂訳97頁、カッコは筆者が挿入)。

石井はこの②のマルクスの指摘について交換になんらかの(価値の)合理性を仮定することは、誤った理解を導く。そこで石井が強調するのは、製品に内在した価値を根拠にして交換が起こるのではなく、交換が起こってはじめて価値が見出されるということである(石井、1996、166頁、カッコは筆者が挿入)。

上記の②の石井の引用する文章は、マルクスが「商品の物神的性格とその秘密」で述べた指摘である。ここでは、論理的に交換関係の主体はまだ登場していない、それはなぜか。マルクスがその商品経済社会には背後で人と人との取り結ぶ「生産関係」= 価値法則が働くことをまずいわんとしたかったからである。石井の着目する、その交換主体は、第二章 交換過程において登場する。この劈頭では「商品は自分自身で市場に行くことができず・・・(筆者略)・・・したがって、われわれはその番人を、すなわち、商品所有者をさがさなければならぬ」として、マルクスは、次の③を指摘する。

③商品は、それが価値として実現される前に、使用価値であることを立証しなければならない。なぜかというに、商品に支出された人間労働は、それが他人に対して有用な形態で支出されるかぎりのみ、かかる人間労働の性質の性質を受け取るからである。その労働が他人に有用であるか、したがって、その生産物が他人の欲望を充足させるかどうかは、・・・(筆者略)・・・諸商品が交換されてはじめて証明しうることである。/あらゆる商品所有者は、その商品を、ただ彼の欲望を充足させる使用価値をもつ他の商品にたいして譲渡するだけである。そのかぎりにおいて、交換は彼にとっての個人的な過程である(資本論第1巻、向坂訳、113頁)。

このようにみると、マルクスは、石井の言う製品に内在した価値を根拠にして交換が起こるのではなく、交換が起こってはじめて価値が見出される、ということを考えていたということであり、石井の批判する①をはじめ②は、すでに明らかなようにマルクスに対する批判の根拠にも石原に対する批判にもなりえていないのである。また、ボードリヤールは、この石井の価値批判とは異なり、小論第4節(1)の①で説明するように、この②マルクスの価値について「依然として基本的な意義をもつ」と主張し、ソシュールとマルクスの記号論の一致を認め、ボードリヤールの独自の記号論を展開する上で②の価値規定は基礎となっている。それにもかかわらず、石井のように価値そのものを否定するならば、競争的使用価値の恣意性を主張する上で、同氏のボードリヤールの記号論における論理的よりどころさえ失うことになりかねないのであり、石井の価値否定とボードリヤールの価値肯定とは、食い違いが生

じる結果となっている。

だとすれば、石井(前掲書、163頁)は自ら言うところの文化が規定的要素となって生産を規定する局面こそが強調されなければならないとしたが、この文化の記号の規定のルールとは、そして、その記号生産、コード化、記号の価値とは、いったいどのようなものか。結局、石井の言う、文化関係を重視したマーケティングにおける記号の交換システムのフレームワークについて同氏は、その方法論さえ提示していない。これについては石井の主張に大きく影響を与えたボードリヤールの消費社会論の構図とそこにおける記号論など、その他の内容を解明して、はじめて石原理論に対する批判が可能になるのであって、これまでのサーベイを通じて判明したのは、石原の競争的使用価値を批判するには、石井の主張は論理不十分と言わざるをえない。

以下ではさしあたり、石井の主張点、特に史的唯物論における労働についての考えとソシユールの言語・記号論とを関連させ検討することによって、石井の齟齬の問題を明らかにする。そして、石井の主張の根拠はどこに由来するのかその原因を確認してみたい。

(5) 石井の史的唯物論に対する誤謬とソシユール記号論とは異なる解釈

先の(新版)ドイツ・イデオロギーでは、本来の人間は、自らが自然の一部でありながらも、外部自然に対して実践する人間となっていた。そして、人間は、社会的協働という他の人間と自己の存在の共同主間性にもとづいて、集団の欲望を満す目的のために、労働力と労働手段を屈指して、原料となる外的自然に集団で働きかけるようになった。この労働の結果は、その産出された生産物の具体的な「姿・形」を与える形相部分と質料部分に結実する。協働化する観念的労働あるいは精神的労働は、人間の具体的有用労働に含まれて原材料に対象化され、「産出された使用価値に内在」するようになる。それにもかかわらず、石井はスターリンの「生産力」中心主義こそがマルクスの弁証法的唯物論の基本的な考えだとみなしそれを批判するために、社会的関係性において労働の意識性や言語・記号の物質化を下部構造において捉える視角が失われるようになった。そのため、共同主間性にもとづく観念的労働の対象化はその使用価値の中に「物象化」(記号化)せず、土台においてマルクスの生産的労働の本源的規定は認められないという主張となり、現実の世界の外、形而上学的観念論の上部構造で記号論が展開されていった。以下では、石井の主張に対して反論を試みる。石井のように下部構造で観念的労働の「物質化」を認めないとするならば、ソシユールの記号論やマルクスの価値形態論との齟齬が発生するようになるはずである。その際、前提として、先に述べた①の大工の作る家を木造の家として仮定し、下部構造におけるこの観念的労働の物質化＝記号化を検討したい。

・ソーシャル記号論とマルクスの価値形態における象形文字化の同一性

大工の作る木造の家について、ソーシャルの記号論に依拠すると、承知のように、先の①の「家」は=いえと書き、イ・エと発音する。これはシニフィアン(SA)として能記される。このシニフィアン(SA)の能記によって、人間の感覚で受動的イメージされるものがシニフィエ(SE)の所記である。このSAとSEの表裏一体=全体で指し示すのがソーシャルの記号論である。

大工の労働は、まず、取り掛かりとして、社会的に「家」=いえと書き、イ・エと発音するこの家(SA)を作るために、頭の中でその家をイメージ(SE)し木造の青写真を描く。そして、大工は、原材料となる材木や道具、人を揃えて工事にあたり、人間が道具を使用し材料を加工して、当初イメージしたように人間集団と意識的かつ言語活動を伴いながら協働を行い、青写真を具体化させる。こうしたプロセスを経て大工が作った家(SAとSE)は完成する。この場合、完成した家は、大工によって具体的な「姿・形」を与える形相部分と木材という労働対象の質料部分の二つの要素から構成されている。したがって家には、形相的概念としての言語・記号の意識的労働が原材料に対象化したとみなされる。そのため、石井のように労働の観念的かつ精神的部分が上部に位置するとはもちろん言えない。そのようになるのは石井が生産と労働とを全く同じに捉えているからである。

また、家を作ることを依頼した所有者は自分が住めないことを理由に、交換に出したいと言いつつ出たでしょう。しかし所有者が暮らしていこうとする社会は、未開で交換手段の貨幣もないため、物々交換になった。このような仮定のもと、マルクスの単純な価値形態で説明するならば、泣く泣く所有者が物々交換に出さざるをえなくなった家は、それ自らの家の値打ちを表現する手だてがないので、他のモノとの比較においてそれを確認しなければならない。そこで交換に出された家の値打ちは、牛10頭になったでしょう。これをマルクスの単純な価値形態で表現すると、家は、牛10頭という等価形態の値打ちで「意味される」(SE)ことで、さらに、その家は、家一軒という値打ちを「意味する」(SA)相対的価値形態で表現される。

したがって、ソーシャルの記号論によって、この関係を示すならば、所有者が手放そうとしてもつ家は、意味する能動的なシニフィアン(SA)の使用価値として捉えられる。そして、牛10頭の所有者が交換をしてもよいと思うほどにその家には交換価値のシニフィエ(SE)が内在するということである。ここで明らかなのは、その家には、一方において使用価値という(SA)が内在すると同時に、他方において交換価値という(SE)も内在することとなっており、ソーシャルの記号論の定義で示されている通り、あるいはマルクスの言う通り、家という生産物には使用価値(SA)と交換価値(SE)との二側面が同居するように捉えられる。これは交換の比率が牛8頭になってとしても、馬6頭になったとしてもソーシャルの記号論では、

使用価値(SA)と交換価値(SE)との二側面が同居し、これを指示対象として記号が成立するという考えには変化がない。後で明らかになるようにボードリヤールの言うマルクスの象形文字はソシュールの記号と「当初」は一致しているのである(小論第4節(1)の①の引用を参照のこと)。

しかし石井の場合、伝統的には上記のようにシニフィアン(SA)とシニフィエ(SE)の両方によって記号の成立する前提、すなわち生産物には使用価値(SA)と交換価値(SE)との二側面が同居するにもかかわらず、本来、交換価値であるはずのシニフィエ(SE)が欲望の生成＝シニフィエ(使用価値)の生成によってはじめてシニフィアン(交換価値)が成立すると考えるので、従来の使用価値(SA)と交換価値(SE)の定義づけの関係が転倒する結果となる(転倒理論の展開)。そうなるのは、観念論と実在との世界の区分となっていた指示対象(記号)がシニフィエとシニフィアンという記号内部の線引きに用いられるようになるためであり、人間の感覚でイメージされるものが記号の使用価値のシニフィエ(SE)となり、シニフィアン(SA)の交換価値の記号の戯れがはじまるようになるからである。しかもその線引きの区分の移動によってシニフィエ(SE)と欲望の生成が観念論の世界で展開されるようになると、「実在」がどうであれ、それとは分離された記号の価値(SA)、すなわち「脱工業社会」(記号によるサービス化、サービス経済化)が上部構造の観念論の世界で主張されるようになる。そこに石井の主張する使用価値の恣意性の根拠があるわけである。もちろんそれは下部構造において展開されるソシュールの記号論とは異なるということである。

以上の検討で判明するのは、マルクスの記号論(ソシュールの記号論)と石井の主張する記号論との差異が認められるため、石井にあっては、個別的な記号の恣意性がどのようにして社会的構造をもった記号として定着するのか。すなわち言語・記号化などの文化が「生産関係」をリードする社会構造的プロセスについて提示する必要がある、単なる競争的使用価値の振る舞いでは収まりきれない局面をもつ。また、第4節のボードリヤールの検討で明らかになるように、彼の言葉を借りれば、それは、戦略的価値と戦術的(使用)価値の相互関係について石井は論証する必要がある、と批判することも可能である。つまり石井は、マルクスの価値を批判したが、「脱工業社会」＝サービス経済化のもとで、属性としての記号の使用価値(有用性)と記号の価値を説明しなければならなくなるのである。

以下、第4節の(1)(2)の検討では、ボードリヤールによるマルクスの経済理論における批判と補完の作業を捉え、マルクスと一致をみせながらも、彼の独自の記号論を展開し始める(3)と、そこでの問題点を(4)で考察する。そして、これら(1)(2)(3)(4)の検討の後で(5)で展開されるボードリヤールの、原始共同体社会にみられる豊かな社会についての考えに学びながら、同氏の消費社会論について検討してみたいと思う。

4. ジャン・ボードリヤールの記号論的分析とそれによる消費社会の実現

(1) ボードリヤールの生産の鏡におけるマルクスの批判的継承

ボードリヤールはその著『生産の鏡』(Baudrillard, J., (1973), *Le miroir de la production*, (1981), 宇沢・今村訳, 39頁, 脚注9)の中で、第3節の(5)で石井の引用した②を取り上げて、次のように言う。

ボードリヤール曰く。

①〈価値は自分が何であるかを額に書き記しているわけではない。それどころか、価値は各労働生産物をひとつの社会的象形文字にする。時がたちはじめて、人間は象形文字の意味を解説したり、人間が協力した社会的作品の秘密を見破ろうとつとめる。そして有用物の価値への転化は、言語と全く同様に、社会的産物なのである。〉(カッコ内はボードリヤールによるマルクスの引用)。

この①で理解できるのは、ボードリヤールが言語を社会的産物として有用物と同じ性格を与えて、「実在」としている。先にドイツ・イデオロギーを分析した際に、言語は意識とともにその生産は古いとしたところで、言語は人間の「実存」の意識表現であり、物質的生产の一部を形成するとした。ここでのボードリヤールの主張は、マルクスの「実存」の物質性＝人間の意識や欲望の言語表現を有用物として修正し、彼は、観念という意味でその幻のような言語・記号表現が上部構造で実物と同じように存在するかのように認識するために、「実在」の意味で捉えようとしているのが分かる。そして、マルクスの価値の秘密、つまりボードリヤールの言うところの「実在」においては、生産物のみならず、生きたままの労働それ自体、さらには労働の効用も含まれるとし、マルクスの言う「実存」も「実在」も区別することなくそれらが記号表現のもとで一致することを含意させるため、ボードリヤールは、マルクスの象形文字と言語、労働との関係について次のように言う。「このような価値の秘密の分析は総じて依然として基本的な意義をもつ。けれどもこの分析は、分配と交換に捉えられた労働生産物(および労働それ自体)についても有意義なのである。①効用は(労働の効用も)、そもそも社会的に生産された社会的に規定された象形文字的抽象化なのである。(未開の)交換を研究する人類学のおかげで、われわれに効用の自然的明証を破壊して、マルクスが交換価値について行ったように、②使用価値の社会的・歴史的生成をつくりなおさざるをえない。それができたときにはじめて、社会的象形文字は全面的に解説されるであろうし、価値の魔術(商品の物神的性格の秘密)も根本から払いのけられることになるであろう」(1973, *ibid*/1981, 39頁, 脚注9, ①②の記号は筆者が挿入)。

このボードリヤールの主張は、マルクスの言う商品の物神的性格とその秘密は依然として意義をもち、価値の秘密の分析が必要であることを意味するものである。マルクスの言う論理レベルでは私的労働の生産物の価値は他者の使用価値の表象を借りてはじめて社会的使用価値とならなければならず、この交換過程(価値形態規定)は、個々の各労働生産物に対する個々の象形文字化を社会的象形文字化=社会的コード化へと浸透させる経済的システムにおける「物質化」=「物象化」の過程でもあった。しかし、ボードリヤールは、その資本制生産における交換価値に媒介された社会的コード化そのものについて論理的切断を一旦ほどこし、資本制「生産関係」(実質はその「生産関係」を含まないスターリンの唯物史観的解釈のもとづいた「生産力」中心主義の産物=物化論)のベール剥ぎ取った上で、そこで生産的労働機能の基盤となっている①「労働それ自体」や「労働の効用」の象形文字的抽象化=差異・異質をもった労働の作用部分を抽出する。具体的に言えば、この方法は第1節で指摘した下部構造での「いわゆるサービス労働」機能による記号化を労働の有用性、労働の作用という労働一般機能において上部構造で抽象化することを意味する。そして、この土台から上部への形而上学的な世界での労働機能の転換操作を通じて、マルクスの援用した弁証法的唯物論にみられるような、労働が対象化した商品にその価値の源泉を求めるのではなく、②このボードリヤールの言うところの生産物(商品)の「实在」の記号論とは切断された論理水準、すなわち形而上学的観念論の世界で、その商品の「实在」の記号のもとになっている労働機能一般を、記号=労働機能の「实在」として抽出しさらにこれを再構成し直すことであり、この「实在」の当否についてはここで措くとするが、その目的は、物象化のもとにおいて疎外される主体とこの客体化を同一視し、喪失した主体の復活の契機(大野(節夫)、1977、94頁)を、言語・記号化する消費社会に求めようとするものである。このような意味においてボードリヤールは、その象形文字的抽象化にみられる自己と他者を区別する労働の差異性や異質性を重視することによって、人間本来の欲望における「記号の価値とその効用(労働の効用=労働の使用価値的側面)」との二つ関係を規定し直すというものである(この問題点については本節の(4)で指摘する)。

ボードリヤールは、このようにマルクスの生産と労働とを同一視することによって、②一旦切断されたマルクスの経済的交換システムの社会的コード化を、その象形文字的抽象化した労働機能の中に埋め戻し、形而上学的なこの記号とマルクスの象形文字の連関を統合することより(Baudrillard,J.,(1973), *Le miroir de la production.*/(1981), 宇沢・今村訳『生産の鏡』101-120頁)、直上のボードリヤールの『生産の鏡』の引用で明らかのように、彼の意図は、マルクスの「価値の秘密」の方法にならってマルクスの記号論をよりいっそう豊富化することにある。つまりボードリヤールは、石井とは異なり、マルクスの「象形文字」の第3節(4)の②

引用で明らかにされている大枠を残しながらも、未開の社会的交換システムにみられるような社会的に規定された象形文字的抽象化における物質化＝ゲオルグ・ルカーチ(1923、『物化理論』)の言う物象化を重視し(脚注3、4を参照のこと)、この物化論(ルカーチの言うフェティシズム)のベールを破棄することで、③記号の価値とその効用によって社会の変革と消費様式の変動はかろうとするものである。そのためボードリヤール(Baudrillard,J.,(1970), *La société de consommation:ses mythes,ses structures.*/(1979), 宇沢・今村訳『消費の神話と構造』)は、資本制生産で社会的コード化された経済的交換システムにおいて、未開社会のみられたような共同主間的協働行為にもとづいて社会的交換活動をはじめ芸術・文化・宗教などの「相互扶助」(ibid./1979, 同上書、78-79頁)活動を図り、浪費する社会コード化を無意識的に受け入れることが可能な「競争的協同」化の社会を実現すること(ibid./1979, 同上書、122-123頁)。それによって現代消費社会の不安定化と安定化の「両義的」(ibid./1979, 同上書、59頁)な社会を構築する、「脱工業社会」に向けてのビジョンをボードリヤールは提示するようになった。

したがってボードリヤールにとっての最終ゴールは、それまでの西洋の生産中心主義的な効用にもとづく知や知識の体系の経済システムを破壊して、マルクスの言う商品の物神性格に支配された社会の否定と、そしてそこで暮らす、「疎外」された人間を開放しようとする「生産の鏡」の解体を必要とするのである(Baudrillard,J.,(1973), *Le miroir de la production.*/(1981), 宇沢・今村訳『生産の鏡』、32-33頁)。すなわちボードリヤールにとって、生産＝労働は消費と対立するものであり、彼はここで近代工業社会から消費・流通社会への転換の重要性を主張し、文化(言語・記号論)が資本制社会の「生産関係」を促進あるいは制約する局面を強調しているとみてよい(Baudrillard,J.,(1968), *Le système des objets.*/(1980), 宇沢訳『物の体系』260頁)。

(2) ボードリヤールの記号論によるマルクス理論の批判と補強— 石井の主張の齟齬問題 —

こうしたボードリヤールの提唱する全体フレームワークをみると、彼の課題設定としては、①人間本来の欲望における記号の価値とその記号の効用(ルカーチの言う裸のままの労働の効用＝労働の使用価値的側面＝有用性)という文化関係の明確にすること。そして②マルクスの理論における「社会的象形文字化＝社会的コード化」を肯定し、①を基盤として②との連関をもたせながら両者の相互関係を解明する。この結果、ボードリヤールが意図するのは、③現代の社会の交換システムにおいて記号論が取り込まれることで社会構造や経済構造の変革＝「脱工業社会」を実現する。これが彼の目的設定にされているとみてよい。

つまり、先の石井はこれらのマルクスの記号論を批判的に捉え、それを補強・修正する

ボードリヤールの分析を飛ばして①と②の連関を無視し、一方的にマルクス批判を行っているため、第3節でみられたようなマルクスの唯物史観に関する理解、交換価値と使用価値の関係、それに由来する価値形態とソシュールの記号構造論の解釈に関する諸問題などを残し、ボードリヤールによる③の記号論の主張は、もともと資本制経済システムの批判にもとづいて社会的交換システムを構築しようと意図したものであるが、その目的についてあえてここでは問わないまでも、石井は、この社会システムと経済システムの関係について全く分析されないままとなったと言える。したがって、批判された石原(1996、184頁)にとっては、石井の主張は使用価値の恣意性ではなく、消費の恣意性ではないかと受け取られるようになってしまう。

この意味で本節における分析は石井の競争的使用価値批判の根底にある論理分析とボードリヤールの思考を知る上で、避けては通れない検証である。これを通じてはじめて石井の主張の当否は判明されるのである。

そこで再び、ボードリヤールの主張に戻すと、ボードリヤール(Baudrillard, J., (1973), *Le miroir de la production.* / (1981), 宇沢・今村訳、『生産の鏡』109頁)は、上記で示したように、①から③の転移を解明するために、マルクスの『貧困の哲学』を参考にして、彼独自の視点で批判を加えながらマルクスの補強分析を行った。

ボードリヤールは、まずマルクスの人間の歴史段階の三つの区分を明らかにする。(1)古代社会と封建社会において余剰分だけが交換される時代、(2)産業的物質的生産物の全体が交換において自己疎外される時代、(3)美徳、知識、良心といった交換されないとみなされていたものが、交換価値の領域に入る時代である。ボードリヤールの『貧困の哲学』の紹介によれば、マルクスは、(1)から(2)への移行期において資本の誕生があり、それは交換領域の拡大のみならず、社会的諸関係への影響をみる。しかし(2)から(3)への移行期においては、文化・芸術・知識、情報などが、(2)の段階でえられたマテリアル的な物質生産様式と社会関係の分析によって「資本主義的淫売」としてみなされたとボードリヤールは解釈する。そうした非物的交換は、マルクスによって予見されはしたが、結局、ボードリヤールの解釈によればそれは「隠喩的意味付けとしてしか役に立たない」とされてしまったと主張する。ここで明らかに商業経済論的サービス認識と異なるのは、『剰余価値学説史』において、マルクスがアダム・スミスに向かって「素材の規定性は生産的労働と不生産的労働とのあいだのこうした(物象化の)区分とは絶対関係ない」(拙稿、2021、75頁、カッコの中は筆者挿入)と批判したにもかかわらず、ボードリヤールは、サービス経済化の「いわゆるサービス労働」による下部構造での資本制サービス生産の論理基盤となる有用効果生産説(無形生産物説)の考えについて配慮することなく、ゲオルグ・ルカーチ(1923、『物化理論』)流の商品論レベルでの

実物生産を資本制労働過程の成果とみなし、マルクスに予見されたサービス化・サービス経済化を消費社会の転換として捉え、その実現は、「物化」した生産のベールを脱ぎ捨てて裸のまま労働の機能が現出することによって、非物質生産の浪費的な文化関係に関連する記号化の社会であるとする(脚注4を参照のこと)。このボードリヤールの主張の特徴は、「生産力」の変革のみによって社会の変化が派生するという点であり、人と人との繋がりや社会的「生産関係」の構造的変化に相俟ってその社会の変革が惹起するという視点はない(後述する第4節(4)での今村(1982)による価値源泉の不備問題)。

そのため、ボードリヤールは記号化を、実体をもたぬ幻的存在として上部構造での「本来のサービス労働」の機能とみなし、言語・記号化をサービス化・サービス経済化とイコールと捉える。そして、彼は、それまで否定的に捉えられてきたイデオロギー的世界において、その延長として文化・芸術・知識、情報などを政治と一緒に上部構造に位置するとみなすようになる。

それゆえに、ボードリヤールの分析にあつては、小論の脚注10で記載した飯盛(1985)にあるような「本来のサービス労働」の機能が社会分業の発達により、下部構造(生産部門)のもとに組み込まれる結果、その観念的労働者も通常の生産的労働者と同じように資本を生産する労働者に転化することで、そのサービス資本の自立化を通じて、構造的「生産関係」の変化を捉える分析が軽視されてしまう。つまり、商業経済論的サービス認識で確認できる既述の森下(小論、5頁、1974、4頁、拙稿、2021、脚注1)による主張の、有用効果の生産を前提にした上で「商品生産でも、取引流通のためにも、さらには個人的消費の部面でも(有用効果・無形の生産物が様々な部面で)利用＝消費」されるという社会的消費の変化が無視されてしまうのである。

このようにサービス労働の自立化(サービス部門が資本を生産するという意味で)認めないと、ボードリヤールにあつては、必然的にそれらマルクスの時代においては交換されることなかったサービス労働が搾取・利潤との関係で非生産的労働として否定的に「資本主義的淫売」と理解されてしまい。彼は、それまでの物体の生産から消費領域の分析に視点を移すことでしか、マルクスの生産の用語からそれらサービス労働の否定的性格を離脱させることができなくなる。先にみた象形文字的抽象化＝コード化＝記号論的に説明し直す目的で、(3)の段階において、商品形態から記号形態へ、すなわち、一般等価法則のもとでの物的生産物の抽象から、寡占製造企業のコードの法則にもとづいて消費過程で記号の交換を操作する分析へと転換するようになるのは、そのためである。

したがってボードリヤールの分析では、その操作のために投下される流通費用がその費用を受け取ったサービス企業にとって彼の生産費用に転化し、このサービス労働の自立化と社会

的「生産関係」の変動によって、サービス経済化という価値形成とその構造変化をもたらすという局面は軽視される結果、彼にあっては、コード法則による記号化を単に浪費的費用の増大とその延長で捉え、記号の交換価値へ移行 (*ibid.* / 訳、同上書 112 頁) を「脱工業社会」とみなし、経済システムによって統制されたシミュレーションモデルへと移行を主張するようになるのである (*ibid.* / 訳、同上書、117 頁)。この移行のもとでは、古典的記号の作用の表現であった、社会的威信、卓越という昔ながらの古典的時代はすでに終わり (*ibid.* / 訳、同上書、118 頁)、そこでボードリヤールは、先に『生産の鏡』の破壊を主張したように、原始的な社会から抽象されるような差異と異質性をもった文化的な「費消」(浪費)を伴う労働が社会的消費領域において復活することで、不安定化と安定化の社会において文化がリードする消費社会を実現しようとするのであった。

以上のようにしてボードリヤールの記号論は、本来マルクスの記号論を補強する目的で修正されるための記号論であったが、しかしながら、どうして第3節(5)で検証したように下部構造において規定されてきたマルクスやソシュールの記号論との親和性が破壊され、その座標軸がなぜ上部構造で展開される結果となったのだろうか。それについては、ボードリヤールがルカーチの物化論に影響を受けていることもあるが、とりわけ言語・記号論について言えば、次に考察する(4)の結論を先取りすれば、マルクス・ソシュールの記号論に対するボードリヤールの理解不足が原因となっているからである。この問題を含め、以下で解明すべき課題となるのは、(3)ボードリヤール独自の記号論の展開の内容、(4)マルクス・ソシュールの記号論についての理解不足から派生する問題、そして、労働の効用としての記号の使用価値(有用性)側面と記号の価値側面の関係である。特にここでは、森下とは異なり生産関係の変化を伴わないところで記号の価値をボードリヤールは主張するため、後者の記号の価値とはなにかということが争点となろう。さらに、傾聴すべきはこの記号論への視点の転換にもとづいた、(5)高度資本主義下におけるボードリヤールの消費社会論からみた批判と未来社会への問題認識である。そこで(3)のボードリヤールの独自の記号認識から順次みてみよう。

(3)ボードリヤールによる独自の記号論の展開¹²⁾

ボードリヤールは、その著 (Baudrillard, J., (1972), *L'Echange symbolique et la mort.* / (1992), 今村・塚原訳『象徴交換と死』24-25 頁) において、彼自身の記号論が下部構造でのマルクスの価値論とソシュールの記号論の修正の上に成立していることを、次のように明らかにした。

12) (3)では木原俊博(2004)「初期ボードリヤールにおける資本主義的仮説」『応用社会学研究』立教大学、46号所収、を参考にした。

もともと言語的記号の古典的布置、商品の価値法則のもとに置かれた布置は意味作用の古典的段階では、マルクスの分析する価値メカニズムとのソシュールの記号論の類似ははっきりしている。この価値をその商品形態を超えて、根源的な形態へと転換するのが記号の価値革命である。そこでは、それまでの下部構造での座標的価値が絶滅されて、価値の構造的働きだけが前景に出る。これをボードリヤールは「構造価値法則」(ibid./ 訳、同上書、27頁)と名付け、このシミュレーションレベルでは、あらゆる記号は交換し合うが今や「实在」(物)と交換されることのない「構造的価値法則」に従うことになり、ボードリヤールによれば、このレベルでは等価関係という以前の規則にとって代わり、その記号の生産がコードとして機能することをマルクスもソシュールも予想していなかったと言う。

ただし、水原(2004、127頁)は、この「構造的価値法則」とはなにか。そして記号の価値とその源泉とはいったい何か。ボードリヤールは明示的に何も述べていないと批判する。したがって、推測するしかないと言う。水原によれば、価格、形態などの示差的な対立が価値を生む以上、そうした差異からなる構造(コード)、あるいは規約(コード)こそが、価値の源泉であり、準拠枠ではないかとしている。

ボードリヤールは、このコードにもとづいて、諸事項は、使用価値(物)や「实在」に拘束されずに「全面的相対的になり、相互に置き換えられ、組み合わせられる」(Baudrillard, J., (1972), *L'Echange symbolique et la mort.* / (1992), 今村・塚原訳『象徴交換と死』25頁)と結論を述べ、ゲームに人間が参加することを通じてコード化すると指摘し、ボードリヤールは、彼の主張する記号論と第3節(5)で検証したように下部構造において規定されてきたマルクス・ソシュールの記号論との論理的整合性について検討することなく、そのゲームの事例を脚注13に記すようにオークション¹³⁾に類推させて説明するだけである。そしてボードリヤールは、

13) 市場においては、「供給と需要の関係があり、供給される交換価値と期待される使用価値とのあいだに最大の接近があるが(交換価値と使用価値がある)、オークション(ゲーム)では(物に対象化された使用価値がないのでその財には非不可分性という特徴があり、需給に関連づけがないので)そうではない」(Baudrillard, J., (1972), *pour une critique de l'economie politique du signe.* / (1982), 今村・宇波・桜井訳『記号の経済学批判』136頁、カッコの挿入は筆者による、以下、同じ)。このような主張になるのは、ボードリヤールはモノ(物と使用価値)を産出することだけが生産部門とみなし、使用価値物を作らなければ、非生産部門となるという考えにもとづいているからである。ボードリヤールは、このオークション(=ゲーム)を、アリーナで行われるスポーツ観戦やカジノなどのような、体験や興奮、決闘などにもとづく直接人間を労働対象とするサービス活動における記号の生産としてみなす。

それゆえ使用価値物を産出しない生産は、そこでは「経済的なものとは無関係になる。しかし(サービス業は)それによって交換価値が交換でなくなることはない。……(なぜならば、オークションの場においては)供給・需要というタイプのものではなく、相互の賭博というタイプの交換である」からであり(ibid./ 訳、同上書、136頁、カッコの挿入は筆者による。)、**「オークション」(ゲーム)では、「金**

先の「価値の秘密」をより豊富化する目的で、この人的サービス(業)の範疇に分類されるオークションの事例を物品販売を含む消費のすべての領域に適用することにより、商業労働の機能をサービス労働の範疇に包摂させる結果、彼のこの論理操作方法は、かつて商業労働論争において橋本(1965)などの「反通説派」にみられた「転倒論」の主張に酷似するようになっていたのである。換言すれば、それは商業労働を含む「本来サービス労働」が競争論のレベルになると、労働対象がそれまでの物から人的販売に推移し、労働そのもの(労働の有用性)が消費者に提供されるようになり、それら「本来のサービス労働」が資本家に利潤をもたらすことによって、彼らの生産概念からすれば、もともと物的使用価値を作ることのない本来非生産的労働であったものから、個別資本家としてはその労働の性格が逆転し生産的労働になるという主張となって、それは、いわば先の拙稿(2018、2021)で検証した「反通説派」の論理と類似する内容になっているのである。

したがって、ボードリヤールはこのような商業労働論争において「通説派」の森下と対立する考えを独占段階で敷衍した上で、「価値の秘密」における神秘化を論理的により明確にするために、寡占製造企業の台頭する競争レベルでのサービス経済化を本質的に浪費的な社会とみなし、彼は形而上学における観念論の視点からその生産の鏡を破壊することで、直上の商業労働論争において難点であった使用価値不在の課題を克服するべく、記号の「実在」化とその価値の生成という消費の視点に置き換え、その当否については後述の今村(1982)に委ねることとするが、彼独自の記号論を積極的に提唱するようになったとみなすことも可能

▼ 銭の意味」が変わり、「費消」(浪費)となるためである。しかも「オークションで確立されたこの事実は、消費のすべての領域に適用できる」という(*ibid.*/訳、同上書、130頁)。そこでみられるのはゲームと同じ浪費であるからであり、「消費は、価値/記号の格闘的交換というタイプこのモデルを基礎として、・・・差異の交換、特異な材料、したがって潜在的な共同性を基礎として設定される」ためである(*ibid.*/訳、同上書、140頁)。このような「貴族的なポトラッチと消費」は、「今日では集団的モデルという形態で官僚的に(上部構造において)計画化されて産業」化されており、それは「マスメディア化」によって喧伝される(*ibid.*/訳、同上書、140頁)。しかし、この現代の浪費についてボードリヤールは、その内実を、ポリネシアの原始社会にみられるような物品や富、所有物や経済的価値のみならず、儀礼、祭礼、女、子供、饗宴、土地、労働、奉仕、宗教上の地位などのあらゆるものが交換の対象となる、社会的交換に観られる豊かな社会 Mauss, M., (1969) / (2014) 森山訳『贈与論』、他二篇、岩波文庫)などをイメージし、富は物財の中ではなく、人々の社会関係における社会的交換で生じるとし、先のオークションに類似する光景が現代消費社会において一般化していることを指摘する(Baudrillard, J., (1972), *pour une critique de l'économie politique du signe* / (1982), 今村・宇波・桜井訳『記号の経済学批判』135-146頁)。ただし、ボードリヤールの主張では、その社会的交換にみられる本源的労働が基礎となつて、小論で指摘する商業活動に関連するサービス化とそのサービスが商品として販売されるようになる、サービス経済化という視点はない。

であろう。以下では、ボードリヤールの記号論の内容を具体的にみてみよう。

(4) 美術作品とオークション—交換 / 記号と奢侈的価値¹⁴⁾

ボードリヤールは、オークション (= ゲーム) やアリーナなどの人的サービス (業)、さらに物的財貨販売にみられる交換と、そこで散見される記号の価値について次のように説明する。「費消 (浪費) とは、顕示的された富であり」 (SE: 使用価値)、富の顕示的破壊が行われる。そこで購入され、獲得され、所有された物に、記号の差別的な価値を与えるのは、交換価値の向こう側で展開され、この価値の破壊を基礎とするこの記号の価値 (SA) である。この記号の価値が価値をもつようになるのは、等価関係の経済理論の場合のような金銭の量ではなく、差異と挑戦の論理にしたがって浪費され、犠牲にされ、消費される金銭である。このように、すべての購買行動は、経済行動であると同時に、差別的な記号の価値を生み出す」 (Baudrillard, J., (1972), *pour une critique de l'économie politique du signe*, / (1982), 今村・宇波・桜井訳『記号の経済学批判』130頁)。

そしてボードリヤールは、次のようにシニフィアン SA とシニフィエ SE の関係を位置づける。

図-1 ボードリヤールの記号論における (SA)・(SE) と VE・VU の関係

VE 交換価値	⇔	シニフィアン (SA)
VU 使用価値	⇔	シニフィエ (SE)

(加藤 (2013) を参考にして、記号の経済学批判、169頁より筆者作成)

上記の相互関係についてボードリヤールは次のような解説を加える。

すなわち、「使用価値 (VU) と意味サレルモノ (SE) は、交換価値 (VE) と意味スルモノ (SA) と同じそれぞれの基盤を持ってはいない。使用価値 (VU) と意味サレルモノ (SE) には戦術的な価値があるが、交換価値 (VE) と意味スルモノ (SA) には戦略的な価値があると言っておこう。体系は、機能的ではあるがヒエラルヒー化された両極性にしたがって構成され、そこでは交換価値 (VE) と意味スルモノ (SA) が絶対に優越する。使用価値 (VU) と必要 (欲求) は交換価値 (VE) の効果にすぎない。意味サレルモノ (SE) (と指示対象・・・ボードリ

14) ここでは、加藤弘一 (2013) 「書評 ボードリヤール『記号の経済学批判』」 (『書評空間』紀伊国屋書店) <https://booklog.kinokuniya.co.jp/kato/archives/2013/post.34> を参考にした (2021.4 閲覧)。

ヤールによる挿入)は意味サレルモノ(SE)の効果にすぎない。・・・(筆者略)・・・いずれも、交換価値または意味スルモノ(SA)がそのコードによって表現し、翻訳する自立的な「實在」(物)ではない。結局それは、交換価値(VE)と意味スルモノ(SA)との運動によって生産された、シミュレーションモデルにほかならない」(ibid/ 訳、同上書 169 頁、カッコの英字表記は筆者の挿入による)と結論づける。

以上、ボードリヤールの独自の記号論の展開とその内容について解説してきたが、これについては、ボードリヤールの訳者の一人今村(1982、98-99 頁)による批判がある。それによると、ボードリヤールの独自の記号論はソシュールやマルクスの記号論からして認められないということであり(今村、1982、99 頁)、「ボードリヤールはソシュールとマルクスを誤解しながら、(その誤った)記号論を使いマルクス・ソシュールの記号論批判をおこなっている」(今村、同頁、カッコは筆者の挿入による)とし、今村(1982)によれば、ボードリヤールは、もともとマルクス・ソシュールの言語・記号論の延長としてそれを修正・補強するはずであったが、修正以前からマルクスの「実存」形態が「實在」化にされたりするなど、マルクス・ソシュールの記号論においてボードリヤールの理解不足があり、これが原因となって、結果的にボードリヤールの記号論はあらぬ方向へと独り歩きはじめたと言う。今村はそれについておおよそ次のような問題指摘を行った。

第1に、ボードリヤールは、あたかも記号がシニフィアンとシニフィエの外面的結合であるかのように扱う。記号はそれ自体で表現と意味をもつ。一方において「シニフィアン」が独立に存在し、他方において「シニフィエ」が同じ仕方で存在することを前提にして、その後両者が「外面的」に接合されるといったものではない。この今村の批判は、筆者も小論において述べたように近代哲学においては、主体と客体とが完全に独立し、あるいは物と観念が分離される結果、本来は一体化していたものが、それぞれが独立して存在するような論理操作そのものに問題があると言うのである(先の石井による大工の事例)。つまり、今村によれば、上部構造は、主観的で観念的世界、下部構造は、唯物論の世界で客観的だとする考えを批判し、そのように理解するのではなく、そもそも事物は、下部構造において観念と唯物論との二側面として成立する。それゆえ、使用価値に出会って欲望は生成されると言うことについては、言語・記号論の観点から言えば、その欲望そのものを土台の生活世界(自然)から切り離し、上部構造への観念論的世界の外部に持ち出して、あたかも「實在」するかのようにイメージすることはできないと言うのである。

第2に、ソシュールの場合には、商品の価値形態の場面において、本来SA(シニフィアン)は相対的価値形態としての使用価値、SE(シニフィエ)は等価形態としての交換価値となっており、このSAとSEの双方がマルクスの言う労働の「物質化」と不可分の「形相」とし

て捉えられていた。それにもかかわらず、ボードリヤールの記号論においては、第1で指摘した観念論と唯物論との機械的分離によって、図-1に見られるようにSAとSEとの関係が交換価値と使用価値として逆転して捉えられ、また、マルクス・ソシュールによるSEが形相(形態)ではなく、自然の一部たる人間の「実存」とは切り離されて、上部構造において実物(リアル)なSEとしての欲望が想定されている。この今村の批判で重要なのは、第1節の意識や言語の関係や石原の具体的欲望の生成に関連づけるならば、今村にあっては、形相としてそのイメージは自然の一部としての主体に内在する観念として理解し、主体が対象に対して指向しなごしを向けることによって、それを視覚や聴覚などで捉えることが可能であり、これによって、今村は、自然の人間体内ではそれが模写され、聴きとることで生理学的かつ心理学的に反応することでその対象の認識と内容把握が可能となる、ということについて了解していることにある(意識の客体化の了解)。そこではもちろん体内で神経を通じて物質代謝 = 「物質化」 = 言語・記号化(不可知から形式知への転換)が行われる。そして、今村は、これらの下部構造での認識作用と内容把握をマルクスと同様に生活世界を基盤とする「形相」概念とし、この言語・記号化を本源的労働に位置づけていることにある(マルクスとソシュールの認識論の一致)。それゆえに、ボードリヤールの上部構造での現実世界からかけ離れた観念的世界での認識論とは異なり、この今村のように下部構造での物質概念の認識と内容把握を援用するならば、この「物質化」は、もちろん現実的世界での観念的かつ精神的労働による「形相」化としての「実存」、すなわち、森下(1974、4頁)の言う不可視的な「無形の生産物」(即自財)として認識可能であり、この「無形の生産物」(有目的効果)が生活過程という下部構造において言語・記号化することによって、この本源的労働によるサービス化が浸透し、それが基盤となってサービス経済化に発達させる可能性をもつということになる(「いわゆるサービス労働」を実存形式とすれば、その「無形の生産物」(有目的効果)の消費はサービス機能 = 労働の有用性の消費として定式可能であるということ)。

第3に、先の(3)『象徴交換と死』(1972/1992、今村・塚原訳、24-25頁)で分析した通り、ボードリヤール独自の記号論における戦略的価値体系 = 構造的価値法則については水原(2004)の指摘するように不明確であったが、(4)の分析段階でもやはり既存の記号論との連関において説得的な論証は確認できなかった。今村(1982、99-100頁)は、この記号の価値規定に関連して、まず、ボードリヤールの分析方法を批判する。ボードリヤールはスターリンの生産中心主義を批判し、現実存在する「記号」の戯れを主張した。ただし、その「生産中心主義を批判することは正当であるが、生産や労働という人間の基本的活動(本源的労働)を深く探求することを放棄することは許されない」(今村、1982、99頁、カッコの挿入は筆者による)とし、ボードリヤールによる生産と労働のパラダイムからの脱却によって、消費

領域での本源的労働の軽視を招く結果になったことについて批判する。そしてこの批判に加えて、今村(同上書、100頁)は、その記号分析での最大の課題について、ボードリヤールは記号の価値(利潤)はどこから生まれるかという答えについて自明のごとく前提にして扱う。それは市場における利潤がどこから来るのかという問いと同義であり、彼は「生産と労働の終わり」を宣言することでこの重要な問題を追放してしまった。問われるべきは、記号の生産であり、その剰余(価値)の生産過程である(同頁)、とする。つまりボードリヤールの記号論は提唱にとどまっておらず、記号の価値の源泉を説明しなければソシュール・マルクスの記号論とは別物であり、その記号論には致命的な欠陥が内在するということである。

私見によれば、ボードリヤールは、スターリンを批判するルカーチによる物象化とそこからの脱出を試みる主張を援用し、生きたままの労働が現出すると主張した。そのため、その記号論には生産関係(価値関係)が含まれておらず(石井の価値否定を想起せよ)、その課題は、結局、直上で述べた形相概念の「物象化」、つまり、「森下学派」の言う下部構造での労働による記号化＝本源的労働を基盤とし、「有用効果生産説」による価値形成的性格を展開しなければ、消費社会領域での記号の価値発生の源泉は解答しえない問題であり、この可視的に捉えることが不可能な「物質化」を前提としてはじめて消費領域での本源的生産的労働としてサービス化と、さらには商品化するサービス経済化を解明する必要がある、ということである(拙稿、2018、2021を参照のこと)。つまりボードリヤールが消費一般(物品販売)まで適用した先のオークションの事例で説明するならば、そのゲームや競技にみられるような本源的労働という社会的価値の記号化＝「物質化」が基底的要素となって、商業労働論争での「反通説派」の主張とは異なり、小論のはじめで述べたような商業部門におけるサービス化やそれがサービス商品として販売されるサービス経済化が派生するということである(森下流の「商業サービス」の理論化が可能)。

このようにみえてくると、ボードリヤールの独自の記号論に対する検討の結論としては、交換価値と意味スルモノ(SA)には「戦略的な価値」があるとし、図-1の分子に記載する「戦略的価値」と、分母に記載する「戦術的な価値」の位置づけとなっている使用価値と意味サレルモノ(SE)との関係、すなわち「戦略的価値」と「戦術的(使用)価値」との相互関係が記号の構造的価値体系において不明確な位置づけとなっていることであり、これが難点になっていたということである。

ともあれ、これまでの分析を通じて判明するのは、石井は、このボードリヤールの独自の記号論について、その戦略価値と戦術(使用)価値との二つの関係、言い換えれば、記号の価値の源泉について明確に論証しなければならないことである。これが競争論的使用価値の恣意性を主張する場合の石井の課題である。それを明らかにしなければ石原(1996、192-193

頁、脚注 14) が述べるように、ボードリヤールは、「記号の論理だけが消費の固有の論理たりうる」としているが、その記号の価値の源泉について解明されない限り、ボードリヤールの「記号論的消費論」はソシュールやマルクスの記号論と当初は一致しているため「けっして石井ほど遠く踏み出しているとは思われない」と言う同氏の主張も否定しえないのである。

それゆえ石井の主張する競争使用価値における恣意性は、競争使用価値に関して言えばドイツ・イデオロギーの分析で判明したように、労働過程における人間労働の社会的存在の中に文化・芸術・宗教的物質生産が観念的に備わっており、「生産力」や「生産関係」の発達を通じて生産と消費とは相互に制約されるわけであって、石原の競争的使用価値は石井の批判するような「生産力」中心主義だとは考えられない。したがって、石原の提唱する競争的使用価値は、「生産力」と「生産関係」との相互作用によって歴史的に沈殿されてきた人間の欲望や文化関係に制約されながらも、個別的恣意性に耐えうるだけのルールをもっていると、結論づけるほかならないのである。

(5) ボードリヤールによる未来消費社会への展望

ボードリヤールは、以上のようにして記号論の導入をはかり、マルクス的かつソシュールの記号論の修正を行ったが、記号論の枠でみれば記号の価値の源泉が不明確であり、労働による「記号化」が生きのまま現出するという彼のビジョンは論理的に成功しているとは言えなかった。しかし視点を変えて消費社会という、より実態経済に近づけてボードリヤール言う交換システムをみると、マルクスの「分析方法」とは異なるが、双方ともに資本主義社会批判という「共通性」をもつ。その「共通性」は、マルクスが平等な经济社会システムを理念に掲げ、資本主義生産とその基盤となる私的所有制度の批判を行ったの対して、ボードリヤール (Baudrillard, J., (1970), *Lasociété de consommation: ses mythes, ses structures.* / (1979), 宇沢・今村訳『消費の神話と構造』77-79 頁) は、社会的消費の視点から資本主義批判を行ったことにある。彼によれば、その経済システムそのものが希少性と言う悪循環に付きまといわれているため、国民所得 (GNP) で計測される社会 (55 頁) は、生産性の増大とともにその交換システム自体が益々満たされなければならないシステム的欲求となり、それは生産の領域に属する欲求であるから、人間の欲求ではないとした (77 頁)。この「消費領域」の観点から「豊かな社会」を実現しようとするところが彼の分析の特徴となっている。ボードリヤールの主張を確認すると、現代社会の経済的交換システムは、人間的欲望を無視した上に成立し、豊かさから限りなく後退しつつある、と批判する。彼の理想は原始共同体社会にある。

ボードリヤールは、サーリンズ (1968.11) の「最初の豊かな社会」 (Baudrillard, J., *ibid.* / 訳、同上書、77 頁) に言及し、その特徴を将来への気遣いの欠如と浪費性にあり、真の豊

かさのしるしである(78頁)、とする。その社会での貧困とは、財の量が少ないことではなく、目的と手段の単純な関係でもない。なによりもまず人間と人間との関係なのである(Baudrillard, J., *ibid.*/訳、同上書、78頁)。「未開人の信頼を成り立たせ・・・(筆者略)・・・豊かに暮らすことを可能にしているものは、社会関係の透明さと相互扶助」(78頁)であり、贈与と象徴交換の経済においては、常に有限の財だけで普遍的富を生み出すのに十分である。なぜならば、富は財の中に生じるのではなくて、人々の具体的交換に生じるので、財はある人々から他の人々へと絶えず移動し、富は無限に存在することとなるからである(*ibid.*/訳、同上書、78頁)。交換はもともと経済システムそのもの維持にあるのではない。社会的交換システムが社会基盤となり、それが維持されながら、その上に経済システムによる交換はななければならないとする。それによって「社会組織と社会関係の革命だけがこの定義をはじめてうちたてることができるのだ」(*ibid.*/訳、同上書、79頁)と言う。このようなボードリヤールの主張は、カール・ポランニーによる社会生活の中に経済活動を埋め込む「大転換」と全く同じではないが、類似する内容となっている¹⁵⁾。

したがってボードリヤールとマルクスの「共通性」で強調できるのは、双方ともに原始社会に注目し、若干の差異をみせながら先の史的唯物論における人間の発展の基礎となる労働に着目した点である。マルクスによると、本来人間は自然の一部であり、自己の存在は他者との社会関係もとづいて社会的に存在する人間であった。ところが近代市民社会が形成されると、主体と客体との完全分離され、個々個人の総和としての市民社会一般になってしまう。このような近代哲学の想定する主体は、もともと自然の一部であり、他者との社会的関係のもとで自己は社会的存在となりえたにもかかわらず、この近代市民の自由な人間像によって構成される社会では、生産と消費とが寸断され、市場と消費との分離によって、消費領域における労働は私的なものとみなされるようになった。そこでは、自然を作り変えると言う意味での物質的生産や「生産関係」とは全く関係ない領域とみなされてしまう。この近代哲学

15) ただしボードリヤールの主張がポランニーと区別されるのは、ボードリヤールの主張は、生産と消費との完全分離、そのもとでの交換当事者における主体と客体の相互関係において記号とその価値が発生するのに対し、ポランニーは、交換の基礎となる「制度的枠組み」という制度的設計に依存しそれに支えられることで社会の転換が行われるという傾向にある(荒川、『商学原理』、1983、61頁)。ポランニーには、交換主体相互間の「消費領域」において市場の中で埋没していた記号や労働サービスが派生するというボードリヤールにみられるような視点はない。それよりもポランニーは、阿部・宇野(1996)に見られるような市場外に着目し(拙稿、2006)、中世ギルトの制度に注目したり、あるいは現代の制度設計、法の執行による「大転換」を前提とし、消費者や生活者利益を実現しようとするため、市場内部から派生するあらたな交換主体が登場するという分析は軽視される傾向にあった、とみてよい。

を前提とすることで、生産と消費とを全く別なものとし対立させ、生産と労働をイコールとして近代の消費社会を批判したのがボードリヤールである。彼は、それを基盤として観念的労働による言語・記号の生産を、上部構造のサービス労働の機能とみなし、この資本制生産のもとで社会コード化するシミュレーション・システムについて、「消費領域」でそれを奪還する目的で、独自の記号論を主張する。しかもボードリヤールは、先に検証した石井の主張するミクロ視点のみならず、よりマクロ的な消費社会を念頭に「脱工業社会」のビジョンを社会的記号化によって論理的に「社会的消費領域」で実現しようとしたところが特徴となっている。そこにボードリヤールのもう一つの評価されるべき点があると言ってよい。

しかし、あえてマルクスとボードリヤールの分析方法の「差異性」という点を強調するならば、マルクスの唯物論で規定される人間の弁証法的発展でみると、人間は、商品生産と消費とが分離されるようになって、その消費の担い手は依然として自然の一部たる人間であり、労働力商品を販売する賃労働者でもある。そのため、その私的領域においては、個人の消費する局面をもちながらも自らの労働によって社会的労働力の再生産や人間の再生産を行わなければならない。それは、自己の自然を対象とした物質的代謝や質料変換であり、非市場としての下部構造での物質的生産（無形の生産物）としてみなすことができる。このことは人間の弁証法的発展の論理で言えば、消費者が一旦得られた知識・経験を蓄えながら彼らの消費領域において再生産活動を行うことによって、彼らの欲望もさらに発展し消費社会の歴史も発展することを意味する¹⁶⁾。生産と労働とを区別しないボードリヤールが近代哲学の二分法を援用する限り、この「消費領域」での本源的労働による人間の弁証法的発展が視界に入ることはない。これをマルクスは原始社会での「消費領域」における労働の「物質化」（言語・記号化、無形の生産物）として射程に入れたことによって人間の労働による歴史的発展を説明づけた。

すなわち、商品が流通過程を経て価値形態転換を終え、労働者もしくはその集団はその生産物の使用価値を協働で生産し協働で消費するようになり、他者のために新たな物質的代謝や質料変換をはじめようになる、ということである。商学研究において伝統的に研究されてきた非営利組織の協働組合や、最近 NPO や NGO と呼ばれる組織、企業組織から派生する

16) 事例研究として、拙稿(2022b)において、近年、経営組織論による暗黙知を用いて、人間が地域共同体に参加し、下部構造での労働による言語・記号化＝「物象化」により、地域の活性化において弁証法的発展する事例を考察しておいた。それは小論で展開した弁証法的唯物論と関係しており、近代哲学が規定する実体を作る労働のみが生産とし、そのもとで主体と客体、生産と消費との分離ではありえない時代になりつつある。詳しくは、拙稿(2022b)を参照のこと。

社会的マーケティングがそれにあたる。そこでは、自然の一部たる人間の消費活動そのものやそれを取り囲む外的自然、芸術・文化をはじめとする社会環境の保全や改良に努め、それらサービス労働による記号化が下部構造において行われることを意味する。

そうしたサービス労働 = 本源的労働が基盤となって文化・芸術をはじめ介護サービス、教育、諸サービスの経済化に発展するのは、非市場領域において多様な記号としての労働一般機能の「物質化」(無形の生産物)が人間の生活の中にもともと含まれていたからである。この「物質化」する機能の言語化によって、下部構造¹⁷⁾で労働サービスとして物質的生産(無形の生産物)が現出するのは、人間やその集団はもともと自然から発達して自己の意識や存在を社会的存在として確立し、知識・技術・経験の差異性や異質性をもちながら他者との社会的関係を結び集団を組織化し、彼らの欲望を満たそうとする人間本来の歴史性をもつからである。そうした事例が散見可能となる経済学的意味は資本制「生産関係」に変動をもたらし、一方において近代工業社会の前提とした生産と消費、市場と消費との区分を切り崩すことによって、ボードリヤールの言う生産の鏡の破壊が浸透しながら、現代社会が、より「高次元化」する記号化、つまりサービス経済化にすでに覆われている証左なのである。したがってボードリヤールの主張する「脱工業社会」における記号化は、近代という資本制生産関係に伴う労働の疎外から脱出させるべく物神性のペールを脱ぎ棄て、生産的労働の機能を裸のままに現出させようと意図する、生産関係を含まないものであるから、ルカーチの言うこの物神性や物象化というものが上部構造のイデオロギー形態に位置する政治形態と類似する実存のない幻の存在(剰余価値・価値の源泉をもたないもの)であるがゆえに(脚注4を参照のこと)、現実の下部構造における記号化(無形の生産物化)する社会は、ボードリヤールにとって常にアイデアとしての影になってしまうのである。

5. まとめ

小論では、これまでのところ、ドイツ・イデオロギーにみられる原始共同体を人間の歴史の「かまど」とし、競争的使用価値の論争に関連させながら、ボードリヤールの消費社会論の記号論まで遡り、「脱工業社会」の議論を検討した。

第1節のドイツ・イデオロギーによって人間と歴史の発達を検討した場合、自然の一部たる人間はサービス機能を含む多様な労働機能の意識の流出形態である言語・記号のコミュニ

17) 上部構造から下部構造への、「本来のサービス労働」から「いわゆるサービス労働」への転換に関しては、脚注10の飯盛(1985、92頁、1978、10頁)、拙稿(2006、257頁、2021)。

ケーションに媒介されることによって物質的生産ははじまる。そして、人と人との社会関係を築きながら人間は、物質的生産を行うことで、文化・歴史・宗教などと不可分の社会的関係性を持ちながら社会を創造する結果、自然と人間の歴史は弁証法的に発展するとされた。それにもかかわらず、近代哲学の生産概念はマテリアル的実在を作る労働機能のみが生産とされるため、本来、物質生産と不可分の労働である下部構造の「いわゆるサービス労働」機能の「物質化」が軽視され、その労働を「非物質的」なものに見なすことで、上部構造の社会的コード化を担う労働機能として位置付けることとなった。それが原因となって、第2節や第3節の近代哲学を前提とした競争的使用価値を巡る論争では、生産と消費との分離、その根底には物体(唯物論)と精神の分離をはじめ、客体と主体などの分離の構図があり、したがって競争的使用価値におけるその恣意性に関する論争は、マーケティングによる生産者の提供する、商品に対する欲望そのものが「生産力」や「生産関係」によって、どこかで歴史的に規定され弁証法的に発展する下部構造説と、この歴史的発展とは全く関係なく欲望は、観念的世界の文化の記号やとコード化によって規定される上部構造説との論争を必然的に引き起こすことになった。後者の文化関係の上部構造の記号化・コード化によって欲望は生成されると言う石井説は、小論で検討した限り、マルクスやソシュールの記号論からみて誤謬があり、またボードリヤールの独自の記号論に照らし合わせても、社会的記号の価値生成やその準拠集団といった記号構造論という点からの分析は明示されておらず、課題を残すものであった。

そのため、この論争に関しては、石原説がよりソシュールやマルクス記号論に対して親和的であり、マルクスの弁証法的唯物論の視点からみてあくまでも形式的には、生活手段や欲望の相互歴史的発展に着目し、その論理的整合性がとれている点で、説得的であると評価できた。

ただし石井説の基盤となったボードリヤールの記号論には、工業社会の破壊、いわゆる近代からの脱却 = 生産の鏡の破壊については傾聴すべき点が多く含まれていた。そこで小論の第4節の(5)では、上部構造の形而上学的観念論の世界で規定されるボードリヤールの記号化・サービス化をマルクスの弁証法的唯物論によって展開される人間の歴史的発展に捉えなおした結果、下部構造の生活世界では、もともと多様な芸術・文化のサービス労働機能の「物象化」とともに記号化する無形生産物(有用効果生産説)の基盤が発見できたにもかかわらず、ボードリヤールをはじめとする近代哲学の二分法のもとでは生産 = 物の生産 = 労働とみなされるため、現代消費社会で見受けられる非営利組織のサービス化や営利目的としたサービス経済化によって労働機能が物質化するこのような論理分析が射程には入らなかった。それゆえに、ボードリヤールの主張する生産の鏡の破壊が実際に生活世界で進み、記号のより「高

次元化」した社会を意味する「脱工業社会」が下部構造で浸透しても、その実態は、記号の価値の社会的実存形態を実質的に放棄したポードリヤールにとって、常にアイデア・イデオロギーの世界に映し出される影にしかならないのである。そこに「森下学派」の言う下部構造における記号化＝「有用効果生産説」の価値形成的性格を基盤としてそれに依拠しなければ、解答しえない問題であるということが指摘できた(拙稿、2018、2021)。

〈謝辞〉小論の投稿にあたり、匿名のレフェリーの先生からマーケティング研究における拙稿の理論的な位置づけと筆者の気づかなかった貴重なコメントを頂いた。記して感謝したいと思います。

参考文献（主要なもの）

- Mauss, M., (1969) *Une forme ancienne de contract chez les Thraces*, 1921/*Gift, Gift*, 1924/*Essai sur le don*.1923-24./ (2014) 森山訳『贈与論』、他二篇、岩波文庫。
- Marx-Engels., *Die Deutsche Ideologie*. (1845-1846) ./ (1956) 古在訳 (旧版)『ドイツ・イデオロギー』岩波文庫 / (新版) 新編輯版 (2002) 廣松・小林訳、岩波文庫。
- Sahlnes, M., (1972) , *Stone age economics*. / (1984) 山内訳『石器時代の経済学』法政大学出版局。
- Sahlnes, M., (1976) , *Culture and practical reason*. / (1982) 山内訳『人類学と文化記号論：文化と実践理性』法政大学出版局。
- Salamon, L.M and Anheier, M.K., (1997) , *Defining the Nonprofit Sector : A Cross-National Analysis*, Manchester University Press, pp.280-319.
- Polanyi, M. , (1966) *The Tacit Dimension*, Routledge & Kegan Paul. / (2000) 佐藤訳『暗黙知の次元』東洋経済新報社。
- Polanyi, M., (1966) *The Tacit Dimension*, / (2003) 高橋訳『暗黙知の次元』ちくま学芸文庫。
- Baudrillard, J., (1968) *Le système des objets*. / (1980) 宇沢訳『物の体系』法政大学出版局。
- Baudrillard, J., (1970) *Lasociété de consommation: ses mythes, ses structures*. / (1979) 宇沢・今村訳『消費の神話と構造』紀伊國屋書店。
- Baudrillard, J., (1972) *pour une critique de l'économie politique du signe*. / (1982) 今村・宇波・桜井訳『記号の経済学批判』法政大学出版局。
- Baudrillard, J., (1972) *L'Echange symbolique et la mort*. / (1992) 今村・塚原訳『象徴交換と死』ちくま学芸文庫。
- Baudrillard, J., (1973) *Le miroir de la production*. / (1981) 宇沢・今村訳『生産の鏡』法政大学出版局。
- 荒川祐吉 (1983)『商学原理』中央経済社。
- 飯盛信夫 (1978)『生産労働と第三次産業』青木書店。
- 飯盛信夫 (1985)『サービス経済論序説』九州大学出版会。
- 飯盛信夫 (1990)『サービス産業の展開』同文館。
- 石井淳蔵 (1993)『マーケティングの神話』日本経済新聞社。
- 石井淳蔵 (1996)『商人家族と市場社会』千倉書房。
- 石井淳蔵 (1999)『ブランド 価値の創造』岩波書店。
- 石井・厚美 (2002)『インターネット社会のマーケティング』有斐閣。
- 石原武政 (1982)『マーケティング競争の構造』千倉書房。
- 石原・石井 (1992)『街づくりのマーケティング』日本経済新聞社。
- 石原・石井 (1996)『マーケティング・ダイナミズム』白桃書房。
- 今村仁司 (1982)「消費社会の記号論」(川本・田村・坂本・川野・磯谷編『講座・記号論』第4巻、勁草書房) 第Ⅱ部・第2章所収、86-102頁。
- 宇野・阿部 (1996)『現代日本の流通と都市』有斐閣。
- 宇野・吉村・大野 (2008)『地域再生の流通研究』中央経済社。
- 大野節夫 (1977)「史的唯物論の史的変遷」(服部編『講座 史的唯物論と現代』第2巻、青木書店) 第1部所収。
- 大内・武田・その他 (1956)『経済学批判』岩波文庫。
- 長田浩 (1989)『サービス経済論体系』新評社。
- 長田浩 (2011)『サービス社会の透視』西田書店。

- 加藤弘一(2013)「書評ボードリヤール『記号の経済学批判』」(紀伊国屋書店「書評空間」) <https://booklog.kinokuniya.co.jp/kato/archives/2013/post.34>, (2021.4 閲覧)。
- 木原俊博(2004)「初期ボードリヤールにおける資本主義的仮説」『応用社会学研究』立教大学、46号、所収。
- 白石善章(2014)『市場の制度的進化』創成者。
- 向坂逸郎(1967)『資本論第一巻』岩波書店。
- 小西一彦(1972)「生産的労働と流通労働について」『経営研究』大阪市立大学、121号。
- 田畑稔(1994)『マルクスとアソシエーション』新泉社。
- 西恭宏(2004)「多様志向型組織による商業集積過程の形成の論理とその具体的展開における政策課題に関する研究」『商学論集』熊本学園大学、第10巻第2・3号。
- 西恭宏(2006)「阿部学派」のサービス経済化におけるまちづくり理論の検討『商大論集』神戸商科大学、第57巻第4号。
- 西恭宏(2018)「商業サービスの成立経緯とその旋回に関する覚書」『商学論集』熊本学園大学、第22巻、第2号。
- 西恭宏(2021)「商業資本パラダイムのサービス認識とまちづくりの経済的論理基準」『商学論集』熊本学園大学、第26巻第1号。
- 西恭宏(2022b)「アソシエーション原理からみた商学研究におけるまちづくりの方向性」『商学論集』熊本学園大学、第26巻第2号。
- 野中郁次郎(2003)『知識創造の方法論』東洋経済社。
- 野中郁次郎(2014)『ソーシャルイノベーション』千倉書房。
- 林直道(1971)『史的唯物論と経済学』(上・下)、大月書店。
- 平田喜久雄(1973)『資本論研究入門』法律文化社。
- 平田清明(1969)『市民社会と社会主義』岩波書店。
- 廣松渉(1988)『新哲学入門』岩波新書。
- 廣松渉(1990)『今こそマルクスを読み返す』講談社現代新書。
- 廣松渉(1991)『世界の共同主観的存在構造』講談社学術文庫。
- 古在由重(1956)『ドイツ・イデオロギー』岩波文庫。
- 藤本寿良(2003)「消費と製品のダイナミクス」『流通理論の透視力』第2章、所収。
- 風呂勉(1979)「サービス論的商業分析の性格について」『神戸商科大学五十周年記念論集』
- 森下二次也(1974)『現代の流通機構』世界思想社。
- 御旗節雄(1993)『生きているマルクス』文真堂。
- 馬場雅昭(1989)『サービス経済論』同文館。
- 松尾匡(2001)「最近の日本のアソシエーション論について」『近代の復権』光洋書房、第5章、所収。
- 山村喬(1950)『貧困の哲学』岩波文庫。

Summary

Conflict between dialectical materialism and modern philosophy : in relation to marketing theory

Yasuhiro Nishi

Epistemology in modern philosophy divided the world into idealism and materialism. So, are human desires created by oligopolistic manufacturing companies in the first place? Or is that desire originally defined by cultural relationships? There is a debate.

It is a marketing theory, called a competitive value in use controversy. The essay considered the service economy in this regard.

1. What is human desire? We considered it based on the historical development of human beings by Marx-Engels., *Die Deutsche Ideologie*. There, human consciousness and language / semiotics are both old, and these two developed together with human labor. It was called communication. And it became the basis of the service labor function. Therefore, it was found that services develop on an economic basis together with material production.

2. Based on this historical materialism, we analyzed the conflict between Dr. Ishihara and Dr. Ishii in the competitive value in use debate. Dr. Ishii's view points out that symbols and services are in the ideological world. It was different from the content of Marx-Engels., *Die Deutsche Ideologie*. In addition, Dr. Ishii's semiotics was different from Saussure, F de.'S semiotics and Mark. K.'s semiotics. Therefore, I searched for the problem of Dr. Ishii's claim. As a result, it was found that Dr. Ishii's view was influenced by Baudrillard.J.

3. Therefore, I searched for the problem of Baudrillard.J.'s semiotics. However, there were many problems and they were not solved. As a result of this consideration, it was found that the controversy between Dr. Ishihara and Dr. Ishii was more persuasive for Dr. Ishihara.

4. Baudrillard.J. had a problem in semiotics. But he also had some advantages. It has something in common with Marx.K.'s dialectical materialism, and we considered this point. In a real capitalist society, the true affluence of human beings cannot be realized at all. Rather, it is that the development of services enriches human life. There is a point where Baudrillard.J.'s claim and Mark.K.'s claim match, and it is considered to be commendable.